家庭雜誌

第四拾七號

◎嬰兒に對する母の心得　人間最始の感化は、終生中最大の感化なり。

◎天地間の一怪事　勢力の保存。

◎ビスマーク夫人　知るべし、ビ公の夫人たるが故にのみ敬重せらるゝに非ることを。

◎村の教師　花櫻木に比へられ、清き香りを世に殘す武士の子。

◎父母の惠　如何に深きよ。如何に大なるよ。

文藝倶樂部

毎月一回發兌毎編寫眞挿版木版極彩色密畫入

◎定價十五錢六冊八十五錢十二冊一圓六十錢郵税一冊二錢五厘

◎廣告料一行五號二十四字づめ十錢

文藝倶樂部は從來發行せる明治文庫、春夏秋冬、世界文庫、逸話文庫、文藝共進會等を廢刊し更に精を擇び華を拔くものなり、故に情緒纏綿の人情小說、趣向奇拔の飜譯小說、異譚百出の時代小說、勇壯快活の軍事小說、拔山倒海の冒險小說、奇々怪々の探偵小說、紛糾錯綜せる政事小說等を緯とし、內外古今の逸話彙聞を經とし、普く文藝に關する諸項を網羅して餘すなし、故に濃艷春の花の如きあり、淸楚夏の月の如きあり紅紫絢爛秋の山の如きもの、淡雅瀟洒冬の雪の如きもの滑稽諧謔なるもの、悲愴淋漓たるもの、恠奇變幻なるものを蒐集して限りなき趣味を具へ、兼て俳文、戯文、詩、歌、俳句、川柳、狂歌、狂詩、都々逸、端唄、落語、輕口等、廣く江湖の吟咏代作を募り、以て文藝娛樂の一與とすべし、眞に文林諷誦の一桂枝、風人騷客机頭の珍たらん

第一編 二月三日發兌

序文 石橋思案 嚴谷漣山人

新作 大盃 川上眉山人

盤桃海鶴 南翠外史

古榎 渡邊霞亭

どろゝゝ姬 尾崎紅葉閣 小杉草秀作

新作 寶島 卯の花庵主人

◎口繪(木版極彩色)……武內桂舟畵 ◎挿繪(寫眞銅版)……水野年方畵

(雜錄)◎新寶船の說：乙羽庵◎初夢の判斷法：骨皮道人◎曾(詞)◎西行廓問答：きゝ(蓮)ん子◎我狂言：幸堂得知◎義士の打揚◎勝祝の正月◎合切袋◎祝新年賀大勝利阿房陀羅經其他俳文、詩壇、和歌、新躰詩、俳句、狂詩、狂句、端唄、都々逸數項

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

家庭雜誌第四十六號（大附錄付）目錄

新年大附錄

賢母　蘇峰生

大なる子は常に大なる母に由て育せらる。大隈伯を育したる母の、大隈伯が尋常人にあらざる如くに亦尋常人ならざることを知るべし。看よ蘇峰生が椽大の筆に以て傳したる彼女を。

支那の落語　思軒居士

居士は當代の名家、其清雋潔麗の文梅花の如くに高潔なることゝ、世の共に許す所。

ゆり子が故鄉　湖處子

湖處子田園に歸臥するもの半歲、こゝに其涵養し來りたる新詩想を以て、子が最も得意とする清雅の筆を揮へるものは是れ。

この馬鹿　嵯峨の屋主人

其淸き、其罪なき、其花やかなる、而して其着想の奇警なる。主人が如何に此の珍らしき題目を解くかを看よ。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

十二文豪

- ◎第一巻 カーライル　平田久著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第二巻 マコウレー　竹越與三郎著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第三巻 荻生徂徠　山路彌吉著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第四巻 ヲルヅヲルス　宮崎八百吉著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第五巻 ゲーテ　高木伊作著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第六巻 エマルソン　北村門太郎著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第七巻 近松門左衛門　塚越芳太郎著　定價拾八錢　郵稅四錢
- ◎第八巻 新井白石　山路彌吉著　定價拾八錢　郵稅四錢

平民叢書

- ◎第一巻 十九世紀之大勢　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第二巻 世界經濟上之變動　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第三巻 國家と政府　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第四巻 教育と遺傳　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第五巻 文明之弊及其救治　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第六巻 現時之社會主義　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第七巻 經濟と道德　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第八巻 歷史攻究法　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第九巻 哲學變遷史　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎第十巻 白皙人種の前途　定價十二錢　郵稅二錢
- ◎號外 銀貨之過去現在未來　定價十錢　郵稅二錢
- ◎號外 責任內閣　定價十錢　郵稅二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿八年二月十日發行
家庭雜誌第四拾七號

目録


鳳仙寫

家庭雜誌第四拾七號
（明治二十八年二月十日發兌）

社説

嬰兒に對する母の心得

人の初めて生るゝ唯啼くのみ。乳房を口に含ましむれば僅に之を吸ふことを知るの外、眼を見開けども見へたりとは覺えず、手を觸るれども感ぜりとは覺えざるなり。然れども人生教育の初歩は實に此時より始まるものにして、此時に於ける最始の感化は洵に終生中最大の感化なるを見る。

其極めて無知なるが如くなるを見て之を無知なりとなすは非なり。其極めて無覺なるが如くなるを見て之を無覺なりとなすは非なり。其肉躰に於てたとへば之を仰臥せしむること久しければ以て其頭顱を平扁ならしむべく、左を下にして臥さしむると久しければ以て其左頭の圓形を損ぜしむべく、右を下にして臥さしむること久しければ以て其右頭の隆起を害すべきが如く、或は其母にして常に左方の乳をのみ與ふる癖あれば往々に其子を左きゝにすることあるが如く、精神上に於ける此日の感化は最も速に最も著しくして而も兒子性情終天の基礎となり、遂に復た改め難き恐ろしき印痕を止むるに至るべし。

故に人の母たるものは勿論、或は之が父たり或は之が祖父母若くは親き戚族にして任に嬰兒の介抱に當るものは、須らく此時よりして已に充分知覺あるものに對する覺悟を以て之を取扱ふを要す。

即ち第一に充分の從容和樂を以て之に對すること肝要なり。例之ば嬰兒の最も幼なきものゝ如き、乳房を含ましむる時に容易に飲みつかずしてうるさく啼くこと

あるものなり。而して之れも晝間よりは寧ろ夜深くして産後の疲勞したる母が極めて睡き時などに往々ありがちの事なれど、此くの如き際母たるもの、いらだちあせることあらんには、兒子の軟かき神經に感ずること極めて強く、其泣聲の著しく甚烈を添ふるを見るべし。母の心狀は常に其子の心狀と相渉り、兒子異日の氣象に關ること大なるものなれば、人の母たるものは特に心の和樂從容を保たざるべからず。

是れ獨り其精神上に於ける顯象のみならず、母が喜怒哀樂の劇しき情緒を動かすに當り、其兒に乳して忽ち其死亡を來したりといふ如き、古來稀有の例にあらざるなり。

第二には先づ秩序の慣習を付すること肝要なり。一例を擧ぐれば、嬰兒の啼くが爲に時間を一定せずして乳を與ふる如きは、遂に兒子を我儘者にして少しく食慾の動くことあれば直ちに泣啼し以て其母に暫くも其手を放すこと能はざらしめ、甚しきは爲に其腸胃を害して、不釣合に其腹部を膨大ならしむることあるが如し。善き慣習も惡しき慣習も數日ならずして付せらるゝものなれば、世の嬰兒を有するものは大に注意すべき事なり。

第三には嬰兒の獨立心を養ふこと肝要なり。嬰兒は其初め開きたる空氣の中を恐るゝものなれば、宜ろしく之を産衣に包みて暖かにし而して成るべく一定の時間を獨り臥さしむべし。若し之を愛するの餘りに其母若くは祖母等にして終始之を抱き居ることあらば、忽ち獨臥を嫌ふの習癖を生じ、遂には夜中も之を抱き居るにあらざれば眠らざるに至ることあり。而して嬰兒の獨臥は實に其獨立自治の最始なるを知らずや。

要するに以上は其極て手近き者の一端に過ざれども、此日に於ける感化は實に其人一生の摸型の定まる所なれば、微細の事までも大に注意する所なかるべからず。

科學

天地間の一怪事（其一）

竹越竹代

（一）人智の限ぎり及び理學の目的

學者の中にても最も精密なる思慮を有する者は理學者也。その理學者の中にても思慮抜群と聞し某大學敎授、一日學生の前にて理化學の講義を爲けるが、一人ありて問けるは、『先生凡ての物躰は物質より成り立てりと云ひ給しが、元來その物質なる者は其一個が何程の大さありて如何なる形を爲して、如何なる特色を有するものに候や』と、敎授は頭を搖て『そは未だ何れの國如何なる學者も見しものなく、物質は有機躰なりや、無機躰なりや、それすら知る人なし』と。學生心に笑らつて思へらく、學者と云ふものも、詮じ來たれば普通の人民と其智識に於て、大なる差別なきものならんと。敎授其顏付きに其心を讀みけん。反問して曰はく、『然らば御身に問はん、御身は過ぐる日春先きと秋口は病人も多く死人も多しと云ひしが、眞にかく信じ給ふにや』と。學生は、さも得意顏に答へて、『然り先生、その時候に病人死人の多きは誰れも稱する所にして、實際の經驗は、又たその事實を證して餘りあり』と、『然らば賢しこき御身に問はん、秋と春の初じめは、人躰の如何なる部分に、如何なる影響を及よぼして、病人を作くり、又た何の病氣のためには、如何に關係して死を生ぜしむと明かに敎しへよ』と、此に於て學生も敎授と同じく全く閉口せりと云ふ。

敎授の答たへ得ざるも、學生の閉口せしも道理なれ、學者の智識は歷々全躰にのみに明なれども、其の事の一個々々につきて云ふときは殆んど通常の人民と異ならざる事少からざれば也。たとへば貿易風は赤道直下

にて熱せられし熱風が、南北兩極に向かひて吹き、其の後を埋めんとして兩極の風が又た交換し吹き來たるものなるは、誰れも知り得て餘りあるこゝとは雖へども、さらばその風は赤道の何處にて作くられ、何れを通りて、何れに至たりて、足を止どむるやと問わんに、風の大たいの通り道は、測量も出來べし。その一分子の通路に至たりては、大學者、大智者も答ふる所は皆同じからん、即ち『知らじ』と。

人智の淺さきを列擧して、學者の鼻を折らんことは、素麵を折るよりも尙ほ易すし。

近か頃の學者は、皆落ち着顏に云へり、病氣はバクテリヤと稱する有機物が、人の口や鼻や傷口等より進入して、害毒を加ふるにあり。空氣の中にも、水の中にも、無數のバクテリヤはあり、コレラは水中のバクテリヤより傳染すと、明きらかに說くこととなれども、さて其の虫が如何なる胃を以て、食物を消化し、如何にして成長するやと、精密にたづぬる時は、誰れか滿足なる答を爲し得るものぞ。

種痘の發明者ジエンナーは天然痘を以て、一種の虫が、人躰に寄生して、病毒を發するものなるが故に、天然痘の虫より更らに强よき然し害なき虫を種へ込みて、互がひに戰爭を開らかしめ、惡性なる虫を殺ろし盡くさしめ、人類の肉躰を以て新らしき虫の新たらしき住所たらしめて病毒を去ることを發明せり。さりながら、彼等が如何なる武器を以て、如何なる樣に、戰爭を爲つゝあるかに至ては之を見しものはあらじ。

今試ころみに砂の一粒を取りて、磨碓にかけ、ごりごりと引くべし。一回一回に細まかく割れて、終ひには目にも見へず、手にも觸れざる細微分子となるべし。さてかくして碎だき行かば、砂は遂ひに何程迄に小さくなりて、最後の形と、性質は如何になるべきや、未まだ知るによしなし。水の分子も之れと同なじ。ウ井

リヤム、タムソンと云へる有名なる理學者は、一滴の水も其之を組み立つる細微分子の多きが爲め膨脹せしむれば八千マイルの直徑ある地球と同じ大きさとなるべし』と云へり、此は餘まりに大言に似たれども、實見せざる推測なるが故に、たしかに反論する丈けの論證をも得ず。兎も角も、砂にせよ、水にせよ、その元質を組織せる最微分子は、たとへ如何なる精密なる顯微鏡の力をかるも、人の智識にては到底知り盡くすことは出來ざるべきや確かなる事也。

加之、物躰を組織せる微分子は、一様に靜止するものにあらずして、絶へず動搖、戰爭して、互がひに追ひつ、追われつ、死しつ、殺ろしつあるが上に、最下等の虫類に至りては、己が身躰の二つにも三つにも、裂かるゝことは、反て繁殖の道にして、裂かれたる一部分は、各々足らざる部分を補ぎなひ、新らたに一躰を生して更らに新個の完全なる一躰となることあり。

斯く昨日の分子は、今日の分子にあらず。今見し分子は、後の分子にあらざるが故に、たとへ我等が分子の事に付きて、研究を逐ぐると雖も、その研究せしものと、今あるものと同じからざる上は、その研究は殆ど無益となるが如とし。學者は電氣の力を籍りては、非常なる速力を以て走しりつゝある、星辰の面をも寫つし得ざるにはあらざれども、その之を寫つし取る一瞬間には已でに分子は幾個ともなく變化せり。變化しつゝあるものを寫つし、しかもその寫したる時より、更らに幾變化をか經來りたるものを論じ、研究もし之を基礎として萬事を判斷するものなる事を考ゆるときは學術も殆んど頼むべからざる心地せらる。是れ人の智覺には限りありて、時間の上より云へば、かぎりなき以前の事、限ぎりなき短じかき間のことは、知るを得ず。空間より云へば、非常の大なることも、反對の小さきことも、知り能たはざるが故に、つまり我等の知

覺にては、世界を組織せる眞正の物躰は知るを得ざるは道理なれば也。

此く我等人類の知識知覺は賴むべからざるが如くなるにも係らず、恃むべきもの丶唯だ一あり。即ち之れ等の混雜せる物質の運動の凡べてを統一する理法を推測して知ること是也。理學の目的も此に外ならず。

（二）運動と反動の法則

譬へば玆に無數の金魚を入れたる硝子の瓶ありて、机の上にをかれたりと假定せよ。如何なる大膽なる人も、其中の金魚の一匹の、將來の運動の方向に付きて、未前に豫言し得る人はなかるべし。さりながら、一つのとは明きらけし。即ち金魚は如何に東奔西走するも、その器の依然として机上に安置せらる丶こと是也、これ器中の金魚は、如何にさま〳〵に運動するも、西に向きて行く金魚の力が、一なれば、東に向かふものも、一の力なり。上より下るものが一なれば、下よりも同じ力からにて上ぼる、かくて平均は保もたる丶が故へに、轉覆するの憂へなきは、道理によりて知られたり。即ち別言にて云へば、動力と反動力とは互がひに相反對して、且つ平均を保もつものなりと云ふ、大なる理法のみは明白に確つかと知らる丶也。

さて此の理法は、凡べての物の上に働たらきて、遂がふことなし。今ま小銃に丸を込めて、一發を試ろみたりとせよ。銃丸は一直線に前進し、更らに反動のあるを見ざるに似たり。然らば發砲には果して反動なきやと云ふに、鳥打つ人ゝは兼て之れを實驗せるなるべし。銃丸を込めて一發放なつや、銃丸の前に進すむと同時に、銃の臺尻は必ず銃獵者の肩先きを打ち返へすべしこれ即ち反動力にして、去かも其力の度は、前に進む銃丸と平均也。見るべし今鐵砲の臺尻百オンスあり、銃丸の目方一匁あり、而して此の銃丸は一分時間に十哩の速力を以て走しると假定せば、其臺尻は一分間に

十哩の速力を以つて後へに反動する割合也。如何にして之を知るかと云ふに臺尻の目方百オンスと、その速力十哩を乘じて得たる千はる數は、まさしく丸の目方一オンスに其進行力千呎を乘じて得たるものと相等としき數なれば也。則ち動力と、反動力とは、反對にして平均を保もつの證據也。

他の例を示さんにゴム球等を地に擲てば直ちに飛び上るを見て、反動の力を見得べしと雖も、石を地上に擲ちて見よ、動力に對する反動力は全く無きが如とし。然れども理學上より之を見れば實際之れなきにあらず。たゞ人目に觸れざるのみ。如何にして地に擲たれたる石に反動力あるかと云ふに、石に打たれたる大地は、石の目方と速力に相應したる丈けの力を出だして、石の進入を防せぎ、石を地皮の上へで推し上げしなり。若し然からずば、古來一個の石の落つる毎に、數尺の深かき穴は、太地に穿がたるべかりしを。

此の如く動力あれば之れに反對する反動力ある事は、何づこ、如何なる地に行くも、地球の上より離るゝにあらざる盡ぎりは、行こなわるゝ所の法則なるを見るべし。然れども或人は前の譬なる鐵砲の臺尻と銃丸と其動力、反動力は相同じと云ふことにつきて疑ふものあらん。彼の幾間ともなき先きに進すみて、人をも殺ろし、木をも穿がつ銃丸の力と、僅づかに二三寸後に下りて、人の肩を衝くのみなる反動の力と、其性質と速力に於て相同なじきとは如何なる道理ぞと

（三）勢力とは如何なるものぞ

玆に至たりて初じめて天地間の一大怪物なる『勢力』なるものを說明すべき時は來たれり。勢力とは英語にてエチルジーと云ふ。即ち事を爲すの力、障害物に打ち勝つの力にして銃丸の例につきて云へば、銃丸が特別に隱くし持ちたる力ら也。此力は常に銃丸の速力に伴なひて其力を增すものにして、速力早やければ、勢力

は隨たがつて增すものにして、その割合は立方の九々を以て增すが故へに、速力二倍を增す時は、勢力は四倍となり。速力四倍なるときは、勢力は八倍となる。今我等が一貫目の荷物を、一尺の高かさに持ち上げんには、我等は隨分骨を折らざるべからず。之れを二尺迄持ち上ぐるには、更らに骨折の度を增すを覺ぼゆ。これ地心の引力に抗抵したるの働を爲さんとするによりて、骨の折るものにして、その骨折の度は、即ち我等が勢力を用ゆるの度にして、勢力の度は、即ち物の目方と持ち上げし高かさを乘じて得たる數なるを知るべし。先きに例としたる凡べての事は皆な此の勢力の働きならざるはなし。猶ほ廣く觀察すれば天地間のあらゆる現象變化は皆此『勢力』の爲めならざるはなし。天地の間に不思議なる事ありと云へば『勢力』ほど不思議なるものあらざるべし。

史談

ビスマアク夫人

敬亭生

前の日耳曼宰相老鐵公ビスマアクの夫人、去十一月廿七日を以てヴアジンの閑居に逝きぬ。享年七十一。鐵公は夜を徹して其臨終の病床に侍し、夫人の生命已に去るも、公は其側を去る能はず、自ら電報をうちて日耳曼帝に飛報し、帝后並に日耳曼諸侯王墺伊諸國の君主宰相何れも慇懃深切なる悼辭を電報し、各國の新聞皆爲めに哀悼の辭を演べ、而して夫人の逝去の爲めにビスマアク公の健康を危ぶむ者あり。亦以て知る可きなり、ビ公の夫人に於ける關係如何に深重なるかを。亦知る可きなり、斯くの如く悼惜せらるゝの夫人は、未だ必ずしもビスマアク公の夫人たるが故にのみ敬重せらるゝにあらざることを。

ビスマアク夫人は獨逸ポメラニアの住人ハインリッヒ、フオン、アツトカムメルの女なり。千八百二十四年四月生れ、同千八百四十七年七月二十四歳にしてビスマアク公に嫁しぬ。當時ビスマアク公は年壯氣鋭、樣々の亂行暴動以て「狂ビスマアク」の名を博せし學校の生涯を出で丶未だ久しからず。財產はなく、唯膽力を有し、名譽はなく、唯惡名を有し、前途の見込はなく、唯血鬪好血鬪の達人として有名なるのみなりき。左れば此「狂ビスマアク」がプツトカムメル氏の美少女を娶らんと欲して、禮儀作法を餘所にし顧みず、ツカ〳〵と玄關より押上りて、應接間の椅子もひしぐるばかりドツカと坐し、大音に求婚の申込をなすや、禮儀作法を重んじ靜肅以て家を立てたるプツトカムメル氏夫妻は其愛女を斯る男に與ふるを欲せざりき。然るに其女フローラインは彼無作法なる無鐵砲なる無財產なる無聲名なる荒れ男に將來大に暢ぶ可き萌芽を見て、深く之を愛し、切に父母に請ふて終にビスマアク夫人となりぬ。而して夫妻相携へて新婚旅行をなしたる其折なりき、ビスマアク公が初めて日耳曼一統の明君となる可き孛王維廉一世にヴエニスに逢ひて、相語る數時間、日耳曼の形勢を開陳し、孛國の前途を痛論し、大膽の識見深く王の心を動かし、こ丶に君臣二世の契の原を起したるは。斯くの如くにしてビ公は共に平和健全の家庭帝國を築き起す可き良妻を得、斯の如くにしてビ公は共に三國同盟の盟主たる、佛國蹂躙の大鐵脚たりし、日耳曼帝國を築き起す可き明君を得たり。」

吾人をして此より四十有七年間の家庭の歷史を、數言を以て語らしめよ。若し一々に其變化を叙し、一々に夫妻の間に往復せし手書を掲げ、一々家内の些事屑件を記さむには、日耳曼帝國一統史程の紙頁を費やす可ければなり。何となれば最近の日耳曼史は即ちビスマアクの實傳生歷にして、ビスマアクの外にあらはる丶

言語擧動事業形跡は、また實に家庭の消息と相渉るものの多ければなり。

彼新婚の年より年は次第に轉び行きぬ。當年の「狂ビスマアク」は多望なる孛國國會の議員となり、外交官となり、進むで孛國首相となり、外務大臣となり、丁抹征伐の原となり、討墺戰爭の主動者となり、佛國蹂躙の大鐵脚となり、日耳曼一統帝國の大宰相となり、伯林會議の盟主となり、歐洲平和の掌握者となり、三國同盟の柱礎となり、維廉二世より逼はれてフレドリッシルーヘーの閑居に憤慨する老臣となり、再び新帝と和して隱然黒幕宰相となり、今や白髮頽然たる老翁となりぬ。而してビスマアク夫人は始終一の如く變はらざりき。夫人はビ公が日耳曼帝國を築き起こしたるに劣らざる注意と思慮とを以て、其小帝國を築き起せり。ビ公の一生は大波瀾の生涯なりき。此大波瀾の生涯に一處の靜かなる港ありき。其は公の家庭なりき。夫人は公の爲めに此港を築くが爲めに一生を犧牲となせり。

周到なる注意、眞實なる愛、整頓せる秩序、春の海の如く靜かなる靜穩、夏の風の如く涼しき趣味、愛す可き子女孫、愛す可き幾頭の巨獒、命程に嗜める煙草、馬鈴薯の葉に朝露置きて緑りの草に牛羊臥し林外に粉挽水車の軋々響きて青天緑地に俯す屋敷田圃、香しきビール、燒きたてのパン、新鮮のバタ、自から狩りし鳥獸肉、外交と云ふものなく政略と云ふものなくピストルの音も文書の煩も達せぬ快眠、興來りし時の將碁雙六、興去りての閑行遊歩、此等は實にビ公の身神を一新し、其精力を新鮮にし、幾多の大運動大策畧戰場の大雄圖議會の大演説を釀さしめたる所の暖室にして、而して皆是れ夫人の賜ものなり。議院に火出るばかり討論して、歸れば涼風吹き渡る家の待つあり。血腥く彈飛び劍閃く戰場より歸れば、軍さの神の見舞

はぬ平和の帝國あり。幾多の暗殺は之に脅かしぬ、家には安全なりき。出でゝ疲れぬ、歸つて安息ありき。歐洲列國皆敵となり腹心の者も背くことありき、死もまた更ふる能はざる伴侶は門に倚つて其歸るを待てり。日耳曼帝國の基礎を据へ一時歐洲の運動機を掌に握りしビスマアクの大功を認めば、ビスマアクをして十分にビスマアクたるを得せしめしビスマアク夫人の功も亦決して沒す可からざるなり。



敵多く、事多く、激怒し易く、壓制なし易きビスマアクを助けて四十餘年家に波瀾立てしめざりしビスマアク夫人は、亦た平常の婦人にあらざりき。ビ公戶外の公生涯は、權略譎詐を厭はず、盡く黃金文字を以て書く可き事のみにあらざりき。獨り其家庭に到ては、清粛健全、絕好の摸範とす可きものありき。蓋し夫人か一身を家庭の整理に委たるの致す所にして、亦以て其人となりを卜するに足む。四十七年の久しき、ビ公は實に一日の如く其夫人を愛し來れり。彼は日耳曼國を思はざりし日なかりし如く、

亦其夫人を思はざるの日なかりき。要務の爲にせよ、遊樂の爲にせよ、數日妻と別るれば、公は即ち手翰を飛ばせり、戰塲よりも書き送れり。議院よりも書き送れり。普佛媾和條約に記名したるの筆を以て、「佛國小説一部御送り可被下候」と書き送りたる者も公なりき、鐵血宰相と云はれながら「小生は小形の聖書を手にして○○氏の不信仰を駁し候」と書を送りたる者も公なり、曾て夫人を伴はずして短かき休暇旅行をなせし時、公は書き送りて曰く、御身を伴はずして樣々の奇麗なる景物を見れば、余は眞心の安からざるを覺ふ」と。夫妻の交情見る可きなり。

ビスマアク夫人は單に麵包の世話洒掃の支配にとゞまる婦人にあらざりき。夫人は極めて怜敏にして頓才あり、記臆力非常にして、珍らしき談話の技倆を有したり、唯夫人は率直にして、人の是非を認めて之を公言するを制する能はざりき。夫人をして佛國にあらしめば、蓋しサルーンの明星として、幾多の政治家を動かし、從つて政機を動かす所謂政治的婦人なりしや知る可きなり。然して夫人自からも斯る名譽心なきにあらざりき曾て英國の某女史に書き送りて曰く、妾は御身等の國に生れざりしを憾む、何となれば此國にては自由に婦人の運動す可き餘地なければなり」と。夫人實に斯名譽心ありき。然れども日耳曼今帝が「日耳曼の婦人は皆皇后に倣ふて三者を修めむことを要す。即ち教會、小供及家政の料理」と言はれし如き日耳曼にありて、殊にフレデリッキ皇太后の政治に干繋せるを蛇蝎の如く忌みしビスマアク公の司どる家にありては、夫人が斯る名譽心を滿足せしむ可きの機會なきや明らかなり。夫人は之を知り、而して命に安んぜり。夫人は家を以て國とし、家政を以て國政となしぬ、其技倆其心力、此等は皆其夫の生涯をして成る可く平和に愉快ならしめん爲めに盡されたり。而して成功せり。ビ

スマアク客と語りて談其夫人に及ぶ毎に、常に云ひぬ「余が吾妻に負ふ所の如何に多きか、余は之を口にする能はず」と。是れ眞に過言にあらず。

夫人一女二子あり。曰く長女メーリー伯爵夫人、曰く長子ハアバアト伯、曰く二男ウイリアム伯、皆存す。夫人ビスマーク公に嫁して四十七年、其人多事多端の政界の中央に立ちたるが爲めに、危惧憂慮心痛は、實に尠なからざりき。其人フリドリッシルーヘーの閑居に退きて老を養ひしより、夫人は初めて安息の數年を得、今や國民哀悼の中に靜かに眠りぬ。

北日耳曼ガゼット新聞は之を吊ふて曰く、

日耳曼全國民は、今や斯る重撃を受けたる大老政治家日耳曼帝國創立の一人たる其人に對して、切に同情を表す。夫人が如何に公の家内的生活の大部分を占め、如何に理熱的の扶助者たり伴侶たりしかは、萬人の知る所也。故に國民は須らくビスマアク公一生の事業に對して十分夫人に感謝する所なかる可らず。夫人の感化は假令外界にあらはれざるも、實に公の事業を四方八方に貫流せるなり。逝去せられしビスマアク公爵夫人は今後永く日耳曼婦人の尤も高倘なる群中に名を列せらるべし。

英國にグラットストン夫人あり。日耳曼にビスマアク夫人あり。是れ近世政治家夫人の双美聯璧也。

文藝

村の教師

殘月樓主人

其一

まだ明やらぬ柴の戸を　たゝく水鷄の聲やみて
こなぎ花さくさゝ川の　流れに月のかげうすし
夏とはいへど薄ものゝ　袖にみにしむあけ方の

かぜにまたゝく燈火を　そむけて語る母子あり」
年は五十路を越るぎの　磯のあら浪あらき世を
渡りし老のいたづきに　面わもいたく衰ろへて
折々いづる志わぶきに　苦しき胸をおさへつゝ
『遂に死すべき人の身の　いくさのにはに戰ひて
皇國の爲に死せんこそ　ますら猛男の名譽なれ
思へわが子よ千載にも　あふ事難きたゝかひの
其人かずにましはるは　男子と生れし幸ぞかし
わが家はもと弓矢取る　もの丶ふの家その家に
うまれし汝ぞやよ義雄　花さくら木に比へられ
清きかをりを世に殘す　武士の子ぞやよ義雄
運拙なくて高麗の野の　草むす屍となりぬとも
われは歎かじこの母は　母は譽れとおもふなり
譽ある子を持ちたりと　はゝはほこらむ人々に
われ先立て世をさるも　草葉のかげの父ぎみに
告げまつるべき勳功を　必らずたてよやよ義雄

母のやまひは年經たる　老の病ひぞ氣づかふな
召集の令のことしときに　村長どのゝふりはへて
音信きましぬもごろに　の給ひたりき何くれと
日比いましが心ろして　敎へし生徒も訪きなむ
ひとり此家に留まるも　我はさびしき事あらず
汝のいさをきくまでは　かならず死なじ此母は
心のこさできみのため　國の御爲にすゝまなむ
み國の爲には惜からぬ　命なれどもいたづらに
死なんはをしき命なり　八重にかさなる白雲の
をちの境のくさまくら　その身にふかく心せよ
はゝは明日より產土の　八幡の宮に朝なゆふな
いましの武運祈りつゝ　凱歌うたひほまれおひ
歸りこん日を指折りて　待ぞ渡らむいつしかと』
いづる涙を見せじとて　曇れる顏をそむけつゝ
曇るまなこを閉つゝも　また折々におのが子の
面わまもりて語らふに　涙おとさぬますらをの

心よ千々にくだくらむ　親に仕ふるこゝろざし
人より厚きますらをの　思よ千々にくだくらむ
おもわに威あり眉秀で　目もとやさしき若人は
母のさとしを畏こみて　頭さげつゝ聞きゐしが
やかで形ちを正しつゝ　ふるふ聲をば勵まして
『かねて心に待ちわびし　召の通知のこしよりも
心しきりにいさみ立ち　はやりたてども又更に
母の御上のおもはれて　くづをれゐしを中々に
そのこにまさる母君の　たけき御詞きくよりも
勇氣日比にいやまして　思をのこすことぞなき
父には早くわかれつゝ　御情ふかきたらちねの
ひろき袂におほはれて　御惠しげきはゝそばの
木の下陰にかくろひて　人となりぬる後もなほ
心は千々におもへども　憂ふし繁き世のうさに
御心つかひたえぬうへ　かゝるさびしき山里の
ましらの聲を友とききゝ　峰のまつかぜ谷のみづ

軒端の瀧のあさよひに　おとなふ外に音もなく
くる人もなき一つ家に　母うへひとり殘しつゝ
今より後はあさゆふの　うすき煙もいかにして
たてかますらむ獨にて　いかに寂しく坐すらむ
我より外にたよりなき　母うへ一人のこしつゝ
はるけき國に出たつは　最もわびしと思へども
ゆるしたまへや母君よ　斯る女々しき言の葉は
義雄の詞にあらぬなり　母の御さとし守りつゝ
御國の爲につくしてぞ　はゝの惠にむくいてむ
さはさりながら母君よ　うしろの岡に鹿なきて
秋風さむくならむころ　むかひの峰に炭やきて
初雪しろく見えむころ　風ふくゆふべ雨の夜半
さらでも多病き御身に　心しませやおほん身に
ゆるさせたまへ母君よ　我は泣てはあらぬなり
この勇ましき門いでに　不吉の泪だこぼさんや
母ぎみの子の義雄なり　我は泣てはあらぬなり

文のはやしをふみ分て　幼なき子らに難波津の
なにはの事を敎へつゝ　あまたの年を送りしも
わが國民のなしつべき　三年の兵役をへし身ぞ
朝な夕なに持ちなれし　ふでを劍にとりかへて
雨なす彈丸のその下も　胸をは楯にすゝみゆき
大づゝ小つゝの霰をも　我身を的にすゝみゆき
高麗の荒野に蔓これる　しこの醜草かりはらひ
異國の風にいなゝかむ　駒のひづめに蹈にじり
地理書の上にふみ馴し　旅順口また奉天府
いたらむ處攻め取りて　あたの王が住むといふ
北京のみやこ打かこみ　城のやぐらの上にしも
東のうみにさしのぼる　我日の御旗つきたてむ
御こゝろ安かれ母君よ　皇國の爲につくしてぞ
なき父君の名をもあげ　家の風をもふきおこし
底ひ知られぬ山の井の　深き惠みにむくいてむ』
毀れかゝれる壁の面に　語らふ親子の影おしも
ざびしく寫せる燈火の　光いつしかしらみつゝ
かたる詞はつきせねど　夜は漸々に明けむとす
星はかたちを隱しつゝ　白み渡れるひんがしの
山の高嶺をほがらかに　朝日の影はさしいでゝ
はやしの奥の賤が屋に　國に盡さんますらをの
いでたつあさと庭鳥の　祝ひの歌をうたひいづ

其二

牧場に急ぐあげまきか　柴かりにくる志ば人の
外にはかよふ人もなき　片山かげのはなれ屋に
いかなる事の有ならむ　けさは訪くる人おほし
なみ木の松の下みちを　六人なゝたり打つれて
櫟本生たるあぜづたひ　五人六たりうちつれて
槇の葉隱れほの見ゆる　此山かげにいそぐなり
村の主宰といひつべく　ひとのおそるゝ村長も
村の孔子といひつべく　ひとのあがむる識者も
村の如來といひつべく　ひとのたふとぶ僧侶も

村の悪魔といひつべく　ひとに悪まるゝ若者も
村の舊家とたゝへられ　かどを出でざる隠居も
むらの雀とわざなある　くちかしましき家婦も
村の花ぞと愛でらるゝ　むらをさが子の幼子も
家より見ゆる四方の田を　わがものにせる富者も
千町の小田を耕やせど　われはまづしき百姓も
人の肌へをあたゝむと　はたおりくらす織女も
あるは赭のつえつきて　あるは帽子を手に持て
あるは我子の手を引て　あるは小丈を伴なひて
此山かげのはやれ家に　つどひきたれり遙々と
鍛冶も大工も小作人も　あらゆる村の人みなは
今朝の務めを休みつゝ　集ひ来れりはなれ家に
この山陰のはなれ家の　今朝はいかなる魔力有て
あらゆる村の人みなを　引寄たるぞ此處にしも
雪は降れども凪ふけど　夜あくるやがて我畑に
まづ立ち出づる農夫も　まだ東天のしらまねど
はや打たゝく音たかき　村の鍛工もきたれるは
扨もいかなる故ならむ　さてもいぶかし此朝け

《未完》

家郷への書信

湖處子

(其二)

警固村に着き候處、叔父は案内をも乞はず、直ちに上りこまれ候へば、自分も尾につきて這入り候處、内は真闇でランプも點ぜられず、叔母御も見えず、唯妹が裏の井戸端に居り、無遠慮なる客を見て、アッケに取られ候。叔父は叔父で、直ぐに御飯出せと、頭から命令を下さるゝに、妹は笑しさに、叔父さん餘程御空腹と打返したるに、叔父が詰つてウーと呻きしより、妹は吹き出し、擦り點けしマッチも吹き消され候。

取敢へず有り合ふものにて夕餉をしたゝめ、叔母御を待つほどに、叔母御は自分を朝より待たれたるか、用事出來て午後川端へ往かれ候由、モー追付歸らるゝ頃と妹の申し候。

叔母御の歸らるゝまで爲すべき一事を案出し候。

先年福島〇〇局詰を命ぜられて、東京にて相別れたりし我教會員金田君、春吉新屋敷に住はるゝ由、同局にて聞き合せたれば、春吉の地理を妹に詳はしく尋ね、早速訪問と出懸け候。

苟も人を訪はんに土産も持たず、素手にて濟さんは口惜しき業と、妹に計り候處、幸ひなる哉、昨日自分が荷物と一處に家郷より贈られし長崎芋ありと、其幾分を頒ち、棄てもよしと云ふ古風呂敷一個包み呉れ、御粗末なれど夜中。恥もかき棄とやらと、袖に口あて、打笑ひ候へば、自分も吹き出し、宜し宜し構ふそのかはと、芋片手提灯片手に戸を出んとし候處、我も一處に春吉に行く處なりと、叔父の坐を起ち來られ候故、提灯をば叔父に渡して、門を出で候處、車にて歸宅されし叔母御にハタと出逢ひ候。

芋提げ居ては挨拶もならずと、見られぬ裡にとソーと背後の暗かりに置き、叔父と二人帽を取るやら、辭儀をするやら、叔母御はこゝは外で挨拶も出來ねば、先づ〳〵内へと先に立つて門を入られ候へば、又々引返して候、不親切とは思ひしかど、芋君には其儘外に待たせ候、片隅に置きたれば踏むものもあるまじく、持ち去るものは猶更と存じて。

内に入つて、坐敷に上つて、双方差し向ひ、シヤチコ張つて、手を附いたり、鼻を疊に摺りつけたり、主人の出陣を祝ふたり、悔んだり、我が上京を祝はれたり、普通の坐敷に返る迄は、中々に手間とりぬ。無慘にも芋の一件を、妹に裏切られて、大に叔母御より笑はれ、興味少しく悄氣たるが、遣つて除けろと、其子細を語

りて、叔母御に一時間ほどの猶豫を乞ひて、叔父と二人再び思ひ立ち出でぬ。

片側人家、片側田なる其中道を、たどり〳〵て往く程に、いくら往つても聞きたる處に出でず、其中叔父はこれはしたり、一町も來過ぎたりとて提燈を我に與へて周章てゝ黑影裏に入られしかば、自分はアとばかり、暫時は茫然鵠立たりしが、兎に角にと、其一筋道を覺束なくもたどる程に、さほどにも思はざりし芋の段々と重くなりしが、今は非常に重くなり、手は抜くるばかりになり、提灯と持ち代へ〳〵持ち往きたるに、何とか仕けん、二度ばかり芋の落ちたる音しつ、大四九尻にて候ひき。人家盡きて路分れ、一筋は田中に下り、路の行方、遙かに夜目を睜れば、遙か向ふに眞黑く人家簇かり見へ候へば、是なんめりと、其道に下りて、始めて新屋敷に出で、ソコを聞きコヽを聞き、一筋道に相對ふ人家を尋ね〳〵て、辛うして金田君の宅を出外の畠中に得候。顧れば妹の家とは背中合せと成り居る樣相見え候ものを、迂圓にグリッと一周し來たかと思はれ、一嘆を發し候。

賴む一聲、賴む兩聲、賴む三聲、宛も蘇峰先生が誰(生憎思ひ出さず)を訪はれし時と同樣の情景、四五聲にして漸く奧の方よりチーと答へ候、低くけれど聞覺えのある、懐かしき細君の聲に候。細君の聲と共にパタ〳〵と小く、たばしる足音聞え、唐紙開き、障子開き、戸開き、闇中に躍り出で、門を開きくれ候は、案に違はず一郎坊にて候ひき、アトケもなく涎くりし渠も、三年見ねば、夜見にもしるき天晴若樣と成長致し候。僕を知つて居ますかと問ひしに、宮崎の叔父さんですかと、挨拶が既に大人びて居候。

御母さん宮崎の叔父さんが御出だよと、内に入る跡より、例の芋を戸口に置て訪へば、細君の玄關に出迎かはれて、相變らぬ愛相よき笑顔で「マードーもお珍ら

しい」と云ふ事で、一間に案内され候、折よく金田君も居はせられて、三年來の本懐を達し候。教會にても隨分議論家なりし同君、叛反氣が今に失せず、大方近い内に出さるゝであらうと申され、モー島流しも三年になるので、愈東京が戀しくて堪らず、多分來年一杯にはまた東京で御目にかゝる樣なるかも知れぬ、それを今より樂しんで待つて居ると申され候。成る程友達も親戚もなき處に長く居ては都を慕はるゝも無理はなしと存候。

談、信仰上の事に移り候時到着の初は、大に宗教上の氣焔を吐んと思ひたるが恥しき話なれど、段々と居て見れば、初一念何時しか消え失せ、加ふるに同僚の飲食の交際の餘儀なきに、トモ實に困つたと頭をかゝるれば、細君は奥より燗徳利を舉げて宮崎さんコレ〳〵との註釋に、主も客も大笑ひとなり、細君、仕方がないヂーと歎息引かれ候。されど決して信仰は失はず。今回の西征軍が敵を愛すると、是れ全く神我が皇軍を皷吹し玉ふ事、信じて疑はずと申され候。最も不思議に感ぜしは、教會の事、月報に見えざる一個人の歴史の、能く此家に識れ居る事に御坐候。然して皆不幸の側に御坐候には一嘆仕り候。

細君は子供たちが全く福岡語になりし事を笑はれ、自分も中々上達したれば、シヤベリくらべても中々負けじと云はれ候。然して自分が田舍語で少々ヤリ初め候處、啞然魂を消し、君はドーして左樣に御巧者ですと問はれ候。こゝは自分の故鄕なるとを全く忘れ居られ候。

定めておたつ女は如何に成長しつらんと思はるべく候。實に十六の娘盛、三年前の面影の通りで、實に可憐の少女と相成候。一寸コヽへ來玉へと、呼べど、御母さんの背に隱れて、處が御母樣よりは背が高ければ、

顔が隠れず、餘儀なくうつむきて居り候。白樂天の謂ゆる、「千呼萬喚始出來」るで、猶ほ面をこそ掩いぬ、横向きて恥らう姿、誠に岩木も動かんばかりに御坐候。（我が心は疾く動き居候）。

東京に居た時は、御身と櫻井の娘と、好く供の宅に來て、供を布團で丸めて、乳のますとか、懐て寐るとか、双方から供を酷い目に合はしたが、左樣云ふ事もモー出來まいなと申し候處、「あんな事を」と、眞赤な顔を懐に埋め候、金田君、此子面われで困りますと申され候。

何處にか世話して下さいなとは、冗談の樣な誠の樣な、細君の辭に候。然して是は冗談ではなく、實際良緣を求められ居る容子を見うけ候。人が確かで、腕前のある人なれば、外に望はないと云つた樣な口占の樣に候。人は善し、申分器量は好し、必ず善き緣ある事と存じ候。又わらんとを禱り候。

歸りかげに初めて思ひ出し、芋の土產を語り、細君の一笑を博し候。

一時間の約束の處、猶ほ一時間許も餘計に過し、歸り候處、幸にして叔父も丁度今歸りたるばかりの杯盤の出揃ふ處に御坐候。

今晩は唯有合の料理と申され然とも、其れすら平民趣味の我等には、實に異味にて候ひき。事々しくは數へ立てねど。

さて又永井君（妹婿）は嚮に長谷川混成旅團長の部下に屬して、其二三日前花園口に上陸されし由に候て、其の路次よりの書信は、皆楷書片假名交りの嚴格なる筆跡にて、相手が婦人だけに、預め錯誤を防られたるは、行軍倥偬の際、其行き届たる注意の程、感服の至に御座候。叔母殿はさすが武家だけに、自分等には隨分強い樣に言はるれ共、實は長井君從軍以後、毎日黎明より日中まで、お神參りに忙かしき由、大切なる一人息

子の事なれば、さもこそと大に同情を表し候。且又平生の派手好に拘らず、芝居も鳴物も一切禁止の由、從軍者の母は、寢食すらも安ぜざる事なるべければ、是式の事は別に怪しむべき事にもあるまじく候。

新聞紙の報ずる所に由れば、過般旅順口總攻撃の際、長谷川隊の混成旅團は、二龍山攻撃の衝に當り、一氣突貫して敵壘を拔きたる手際は、歴史上罕に見る所の勝軍の由、殊に其突貫隊が、秋風に吹かれて斷續する狹霧の中に、顯はれ隱れ山を攀る有様、宛然畫中の光景なりし由。要するに天下に敵なき九州軍の中、精鋭隨一と聞ける、混成旅團は、其名譽に相當したりと云ふは愚か、居合せたる外國將官をして世界無比とすと絶叫せしめたるほどの名譽を擔ひ候へば、死すとも遺憾はあるまじきに、彈丸横腹と、腕の間を通過して、衣服にも觸れざりしとは、全く叔母御の祈願、神明の御受納の結果と被存候申すもいと有難き事にて、叔母御の御喜び千萬察申候。

明日は朝九時の滊車にて出發の筈にて、其旨叔母御に告げて休み、翌朝起き出候處、叔母御は既に神社巡拜了り、魚市に出でゝ鮮魚求め歸られ候處に御坐候。毎朝曉四時頃人に知られず家を出でらるゝ由に御坐候。自分が心せく同時に、鮮魚は例の叔母御の敏腕を以て、直ちに盤上の物と相成、二十分ばかりの裡に、坐敷に運され候、一二種の品、汲物にも、煮附にも、刺身にも、酸のものにも用ひられて、一様に流れざる段、自分は唯だ、例の如くアト感ずる外は之なく候。さりながら折角の賓客に、生憎鯛のなかりしは殘念と、さすがの所持家も大に力を落され候、コレはいか様、御尤にて、我等も大に同感にて候ひき。

故郷の人々と異なり、一たび上京すれば、又四五年は足拔きも出來兼れば、實は緩くり留めらるゝ迄滯留し、厭かるゝ迄厄介にも成り度、心には十分に思ひしかど、

何となく先か急がれ候て、僅かに一夜泊にて、暇乞して立別れ、十分妹とうち解けて語る間もなかりしこそ今も遺憾に存じ候へ。御身の上京されん時、緩くり逗留せらるべく候。

出際に叔母御親ら車を命じくれられ候へば、直ちに澁車に向ひて馳せ候、叔父も門の外まで送られ候。

父母の恵　上

藤島雪子

父母の君は、ある所に宴會ありて、夕つ方より諸共に出行きましぬ。はしためらのをるところは、わが方とは隔たりたればあたりいと物靜かにて、ともし火の光のみあらはなり。やり水ははや氷りはてけむ、むせびし音も絶えて遥なる庭の木立を吹しをる木枯の颪も、やう／＼おさまりて、たゞをり／＼竹村をうごかす音のみ雨にやとあやまたる。けさより縫ゐし衣を、やうやう縫終へて、針の數かぞへゐる折しも、小さき子の走り來る足音きこえて、ふすまあけつゝ、お孃さまと愛らしき聲にて呼ぶ。こち入りたまへといへば、かぶりゐし海軍帽をぬぎ、かわゆき手袋とりて、火をけの許によりそひ、オヽさむといひつゝ、手をさしかざしぬ。父母君よそにものし給ひてさびしきに、よくこそとて菓子など與ふ。この幼きおのこ子は、わが門なる家にすむ人のうまごにて、年わけて四歳なれど、かたちあてに心さかしきさがなれば、父母君のいたく愛でたまふに、わが家をおのが家のごと思ひつゝ、日ごとに遊びに來るなりけり。拵へこし支那征伐の双六をひろげて、今宵もこのお話きかせてといふ。昨日は平壤の戰を物がたりつ。今日は海洋島の海戰なりと、樺山中將のこと、坂元少佐のうへ、又まだ定遠は沈みませぬかと問し水兵のことなどをわきやすく物語るに、それから／＼と、話に枝葉の花はさきぬ。又この寒さに

唐士の野にいほりせる兵士の苦辛、さては大きくならば兵士のうちに入て、國の爲に勤むべき事など語るに、いと大人しく、さも感じたるおもゝちに聞ゐるさまいと愛らし。次に樣々の問は起りぬ。そは海軍と陸軍とはいづれが强き。なぜ支那は弱いのなどいふ難きとひなりき。それ〲答ふるに、片言ながら坊は海軍が好きにて水兵となること、それ故水兵の帽をかぶることなど話す。しばしありて、早ねむければ坊は歸らむといふ。こよひも國を去つてを吟じてよといふ。さはと、國を去つて三巴遠しと、高らかにうたひつゞく。こは祖母なる人の日ごろをしへつるにて、うたふ聲いと愛らし。又明日は來たまへ、こは御褒美にとて、この幼子の常に好める干葡萄の、かたへにありしを紙につゝみ、一人にてかへらむといへど、あまりに夜の暗かるべければと、はしためよびて送らしむ。名殘いとさうさうしければ、昨日よみし少女の卷のつゞきやよまゝし。かはれる書にやせむと、次の間に行き、おし入を開きて、本箱の中をあさるに、小さき書あまたかさねたる奥に、皮の手箱のあるを見出ぬ。こぞずゝはきの折に、家人のこの手箱をいづこにか入れ失ひしかば、いたく求めわびゐたるに、かう淺はかなる處にありつるをと、かつは怪しうかつは嬉しうて、ふみよまむと思ひゐしも忘れつゝ、机のまへにもて行きて、手箱をおしあけぬ。この手箱はいと古き皮もてはりたるにて、父君のめでさせたまひしを、われにたまひしなり。中には幼きころより近き比に至るまでの紀念となるべきくさ〲のものを入れてあり。そのもの大かたはかたちさゝやかなれど、各一つの歷史をもたりて、吾爲にはいづれもしたしくむつまじきものなれば、さいつ比よりこゝかしこもとめゐしなるに、かうゆくりなくみいでゝ、古き友にいで逢し心地しつゝ、嬉しさいはん方なし。深き山路をこゆるに、今めのまへなる山のか

たちよりは、過こし山々をかへりみるは、けしきよくなつかしくおぼゆるごとく、人の世も過こし方をかへりみれば、たのしかりしはいよ丶たのしく、苦しくをかしかりしも中々にたのしびの種となるものなりや。父母君は未だ歸りまさず、たゞ一人にてつれ〴〵なれば、机のうへにとりいだして見るに、とり〴〵になつかしきもののみ。

みどり色のリユバンもて結びたる玉づさカルトなどは、佛國にありし比、殊に親しかりし友の、我國に歸りて後おくりおこせし一束なり。わが十才の時なりき。父君おほやけよりよざ丶れて佛國リオン府におもぶきましぬ。しばしへて、われらにもこよといひおこせたまひしかば、母君とわれと二人は祖父君うからの人々におくられて、横濱より佛國郵船にのりたりき。母君は船になれ給はでいたく苦しみまし、大方は室の内にのみこもりませど、われは更に酔はざりしかば、同じ船に乘りたりし岩倉の君をはじめ、人々と日々遊戯室にものして、遊びゐたりき。臺灣にいたれりし時、戰のありし後とて、船にのりゐし軍醫は上陸して、佛國士官のなきがらなどはこびこしは、幼き心地にいと恐ろしくむくつけかりき。また香港に着きて上陸し、一夜を領事舘にやどりしに、かへさ駕をかつぎし支那人らが、與へし賃錢の事につきて仲間あらがひをなしつるは、いとも淺ましかりき。また印度洋より紅海に入る咽喉なるアデンの港に船つきし時、比は十一月の末なりしかど、猶あつさ甚しくて、波を射る日かげたへがたく、汗はながる丶ごとくなりき。日ごろわれをいつくしみくれたりし船長なる人、おもしろきものみせんと、我を伴ひて甲板に出ぬ。いかりおろすやがて帽子につくべき駝鳥の羽と、大なる駝鳥の玉子、指環、珊瑚樹など珍らしき雜貨を賣りに黒人は來りぬ。其顔は墨もてぬりたらんごとく、唇と髪はいと赤く、齒

は白きが、何にかあらむわきがたき詞もてかしましくいふ。叉木をほりて作りたる小舟の、からうじて幼子の一人乘りうべきほどなるにのりたる幼子ら廿人あまりが、匕の形したる擢をあやつり、目を光らし髮のまきちゞみたるが、船の上を仰ぎ、しきりに船の客をよぶ。われら欄干により、小さき貨幣を海になげやるに、われがちにと水の中に入り、そをすくひて海のおもに浮ひいで、叉なげてよとさけぶ。其とく取あぐるは、かの江島のあはびとりの心地して、いと／＼面白かりき。日數ふるまゝにつれ／＼にたへかねて、今日は幾日に成ぬ、いつはつくならむと日々おなじことのみくりかへし、甲板にいでゝ四方を見れど、みわたす限りたゞ高く打あがる波のみ。陸もみえず山もみえぬ大洋のまゝ中なれば、心細くなりて、母君のもとにかへり入りて打ふしつゝ、東京なる家の庭の築山にのぼりて椿を折り、泉水の緋鯉に麩を與ふる夢などみては、しばしわびしさをなぐさめゐたりき。船の中の人のおもわに、同じやうにゑみの波のうかびし日の夕べ、かしこに黑くみゆるこそ、マルセーユの港なれと聞し時は、飛立つばかりに嬉しかりき。されど叉明日よりは、いとゞ詞もしらず顏も知らぬ人々の中に行む事をおもひて心細くなりしかど、港に舟はて、いかりおろす音きこえし間もなく、なつかしき父君さては領事舘の人々の小蒸滊船にのりて、むかへに來りましつるに、其うれひはきえはてぬ。リオン府につきてよりは、日々小學校に通ふ事となりぬ。此府にわがごとく幼なくていたれりしはわれのみなりしかば、叉あだし國の幼な子とて、師の君も友達もいたくわれを愛でたまへりき。學校には程遠かれど、師の君は、運動によければ、ありきてとのたまへど、あるかん事のつらくて、日毎にすめる家のまへより鐵道馬車にのりて、學校のまへにて下りたりき。ゆくにもかへるにも、領事舘の使丁は、

われを送りむかへたりき。その使丁は佛人の中にても、丈けたかき方なるに、われはひくゝ小さければ、友達皆笑ひてカリカチユールのやうなりといひまたボッシユに入る樣なりなどいふに、何となく恥かしかりき。
わが級の師の君は、マリーシャンパレー。アデルシャンパレーとて、姉妹の君なりき。この師の君のねもごろに敎へ給ふことは、同じ級の内にあはれなる啞生ありしに、姉妹の君のあかずたゆまぬをしへによりて、終に文字を書かでも詞をきゝわくるやうに、又いさゝかづゝ發音しうるやうに成ぬ。われははじめのほど詞わきがたければ、唯級の末に連なりて習字をなしゐたりき。さるにわれをあきさせじと、くさ〳〵の菓子をつねにかたへに置て、いつにてもたべよとのたまふ。されどわれひとりたべんもと、いつも手をふれねば、などてたべぬとのたまふに、たゞ顏を紅にそめてゐたりき。又謡を好みたりしに、かの啞生も謡に志深かりしかば、二人の爲に殊更に時間を長く與へられぬ。わがかつ〳〵物語りたるやうになりて啞生に話しかくるに、啞生も又かつ〳〵物がたりす。われもかれも幾度となく聞直しつゝ物語りゐるを、マリー師は嬉しげに打ゑみつゝ、かたへに聞てゐ給へりき。學校より歸り夕けをへし後は、日々父母の君、さらずば領事館の人々、また會話を習ふとて家にやとひし敎師の君と、町をそゞろありきしたりき。玩物うる家の門にはよく立どまりて、常に母君をわづらはせまつりき。ある時、小さき洋琴かひてと母君にこひしに、又こそとのたまひしかば、あまりのほしさに、家に歸りても門より入らず、終に父君と共に再その家に行て、かひてたまいりしこともありき。今より思へばいとも恥かし。日曜日の夕ぐれは、多く公園にものしたりき。たけ高き木どもこゝにかしこに生茂り、かをりよき竹花ども植ゑなべありて、暑きころも寒き比も、いとよき處なりき。

夏の夕べは、高くふきいだす噴水器のかたへ近き椅子によりそひて暑さを忘れ、冬のあしたは、大きなる池のほとりに馬市をとゞめて、窓の内より人々の氷りすべりをなすを見るなど、いと〳〵樂しかりき。植物園にものして暖室の内に入り、時ならぬ花のかをりみてるを愛で、動物園にいたりて、さま〴〵のうつくしき羽もて飾れる小鳥のうたふ歌をきゝ、いみじう大きなる猿、駱駝などを見つゝ、日曜の日としいへば、前の夜より、明日は〳〵といひつゝ床につきたりき。嬉しかりしは、天長節の夜なりき。兩陛下の御肖像をかざれる前に、在留の我國人皆打つどひて、おごそかなる儀式はてゝ後、談話室に人々うつりて、おもひ〳〵に我國の物がたりなどしゐける時、われは家の教師より教へられし暗誦の物がたりをなしたりき。そは猫にむかひてかたる極めて幼き說話なりき。さのみ短かゝらざりしかど、幸によどむこともなく、手をふり足をうごかしつゝ語りしに、いとよくいできたりとて、その日のまらうどなる府のおもだちし人たゝへくれぬ。されど其たゝへられしよりは、父君のいたく喜びましつるおもわを見し、いとも嬉しかりき。教師は泪をさへこぼして喜びくれしは、幼な心にも師の情け身にしみて覺えつ。おもしろかりしはアデル師の誕生の日なりき。その日は、生徒はおのがしく、師にいと大きなる花束をおくらんと定めつ。されど其花の色、花の何なりといふ事は誰も皆かくしつゝ、さだめの時にいたりて、一人づゝ師の前に持行けば、師はあふるゝ笑もて、幼きおしへ子の、心よりのおくり物をとりましぬ。さてそを花がめにさして室ごとにかざり、また上の級の人々の芝居活人畫などあり。中にもジャーン孃の裝の美くしかりしは、此日の花なりき。たのしかりしはノエルの朝なりき。父母の君へのおくりものは、いといたく隱して、學校にて師の君にはかりつ。師の君も何

よからむと、あまた度考へなほして後、父君には我ゑがきし艸花の畫をやきつけたる陶器の狀さしを、母君には我絹糸もてあみし仕事の籠をおくりまゐらせき。十二の年、我國に歸らんとしける時、マリー師姉妹の君は、ことに別を惜みまして、父母の君のもとをふりはへ音づれきましつゝ、今歸りては、これまで學びし事かひなければ、三四年この府にのこしとゞめてよとくりかへしのたまひき。父君は、ねもごろなる心をいたく喜びまして、一度はわれを殘さんかとも定めましつれど、猶幼きものをたゞ一人おかんはとて、終に歸る事となりぬ。出立んとせし週の月曜日の朝、學校の敎場にて、わが爲に送別會を催ほされぬ。其日は、わが級の生徒は、おのがじゝ家より人形を一つ〳〵たづさへきて、師の君とわれとをま中におき、まはりなる人々は、人形をいだきつゝ、茶と菓子のもてなしあり。別の短き文をよむもあれば、古詩の暗誦をなすもあり。風琴をならすもあり。さて各、心々にはなむけにとて、幼子のよむべき小說、みづからのうつしゑ、繪の具、アンクリエなどをおくられたりき。かの啞生は、薔薇の畫をいとめでたくかきて、其下に「長く忘れたまふな」と、うるはしき佛文もてしるしつけつゝ、そをわれにおくりし時は、泪もてわが手にとらせぬ。われも靜かに、年經て再こん時もあらば、其折にも我を親しくしてよといひつれど、其聲はくもりゐたりき。この日われは束ねたる髮に、我國のさくらのかんざしをさし、我國のふり袖をきて行しに、人々珍らしがりて、この摸様は何といふぞ。この帶は何といふ名ぞなど、何くれと問たりき。マリーアデルの二人の師の君に、左右の手を引かれ、親しき友に別れ、二年三年通ひなれし敎場を立いでし時の心地は、今も猶わすられず。大きなる地球儀、いつもつやよかりし机は、おもかげにうかべり。今こゝのリユバンに結へるは、マルグリツト、

ルーイズ。ジャーン。ジュリエット。ローズわしなど、殊に親しかりし友が、我國にかへりてよりおこせし文どもにて、中には、なにがしぬしは級の一番に成たまひぬ。近き比の寫眞おくりまゐらす。おもとのもおくりてよなど、もしくは、公園の猿のうわさ、近き比はやる髪のかたちなどかきてあり。富山に在りし頃までは、文のゆきゝたえせざりしを、千葉にうつり、又東京に歸りてよりは、何くれと暇なきに、心ならず打とだえたりき。かの友達は今いかにうるはしく生たちましつらむ。學の道進みてかあらむ。かの啞生の君の壽は、いかに巧に成ぬらむ。いと慕はし。又 Youki とこがね色のインキもて我名を記せる書翰紙は、小試驗の折、成蹟よかりきとて、庭の旅どいふふみにそへて、マリー師のたまへるなり。あはれ姉妹の君たちは、わが十二にて別れまつりし時にさへ、額の波たかくておはしき。七年八年すぎての今は、いかにしておはすらむ。猶御身健かに、幼き子らををしへ、その生たちゆくを喜び見てやいますらむ。はたわが母君にかたり給へるごと、田舍などにうつりすみて、靜に老のすまひを定めやしたまひつらむ。蔦かづら生まとへりし學校の門、うばらの花咲めぐりゐし公園の垣根、我日ごとに行なれし時にかはらでやあるらむ。いとなつかし。

家政

母と其子

理科大學　市村塘

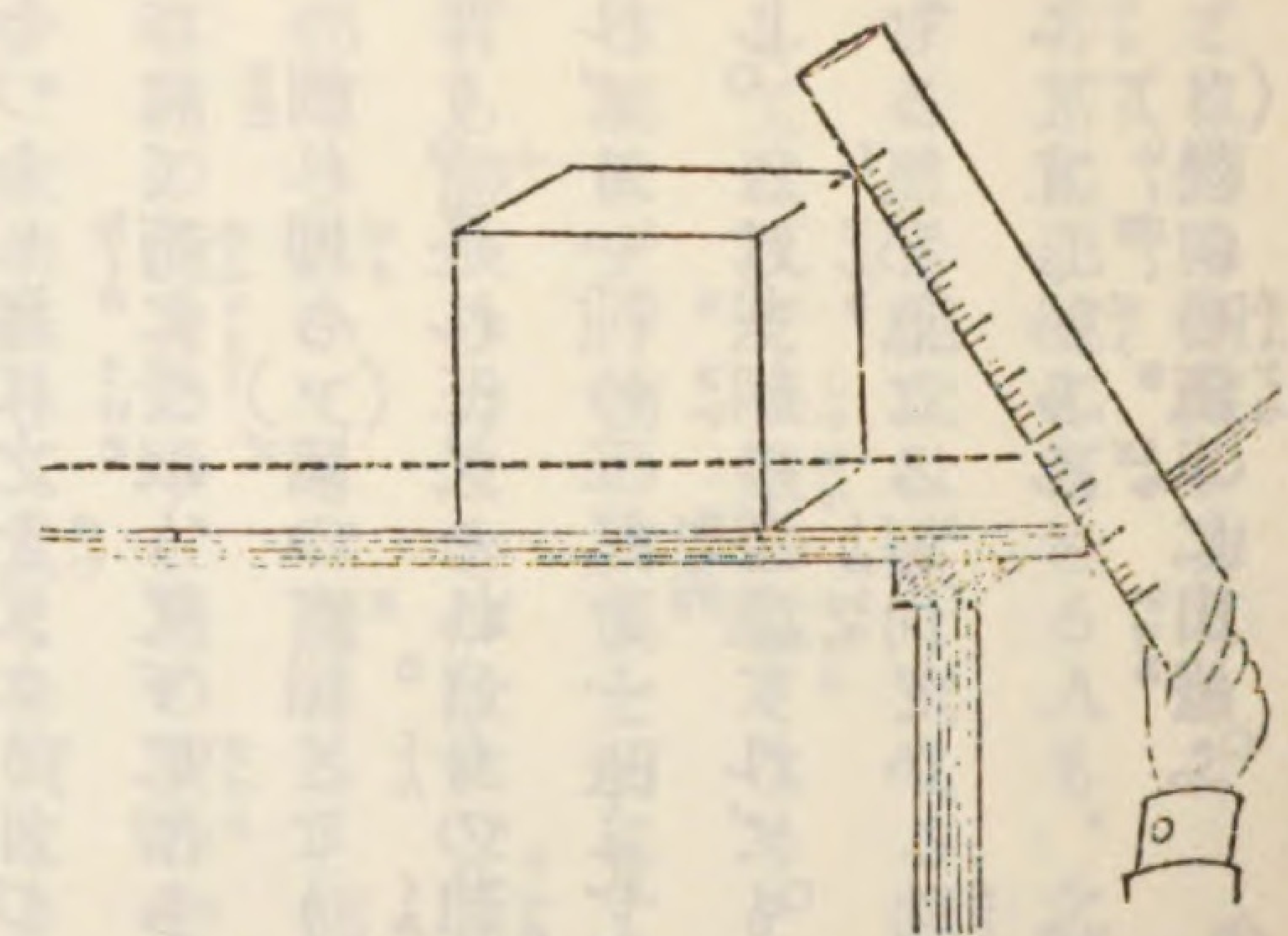
（一）我子の思考力と工夫力とを養成せよ

世の母たるものは父よりも其子に對して密着の關係を有するは言ふ迄もなきとなり。されば小供を變屈者になすも工夫家になすも唯母の敎誨如何にあるのみ。豐太閤の逸事可なり日清戰爭談可なり。然れども大發明

家大事業家を養成せんと欲せば豈に斯かる歴史的觀念のみを幼若なる腦裡に推入して可ならんや。須らく早くより工理的思想を與起せしめざるべからず。蓋し工理事業の結果たる或は鐵道、滊車、滊船に或は電信線、電話機に或は下等植物微菌發見に歴々其成効を見ればなり。一變して商業となり再變して鑛業となり間接に國家の富源を增脹する一大緊務と謂はざるべからず。今や我邦に於て大工學家、大理學家と贊稱せらるゝの人尠なからずと雖も四千萬人に比較して果して幾人かある。誠に寥々として曉天の星も啻ならざるの有樣ならずや。是れ他に事情あるの故かも知るべからざれども母其人が多くは工學理學の理解力に乏しく隨ふて小供に工理關係の面白き談話をなす能はざりしとが與て力あるに相違なからん。予は渠の爲に聊か左に其子の思考力と工夫力を發達せしむる微賛三件を紹介せんと思ふなり

(1)尺度を以て直接に箱の對角線を測定する事

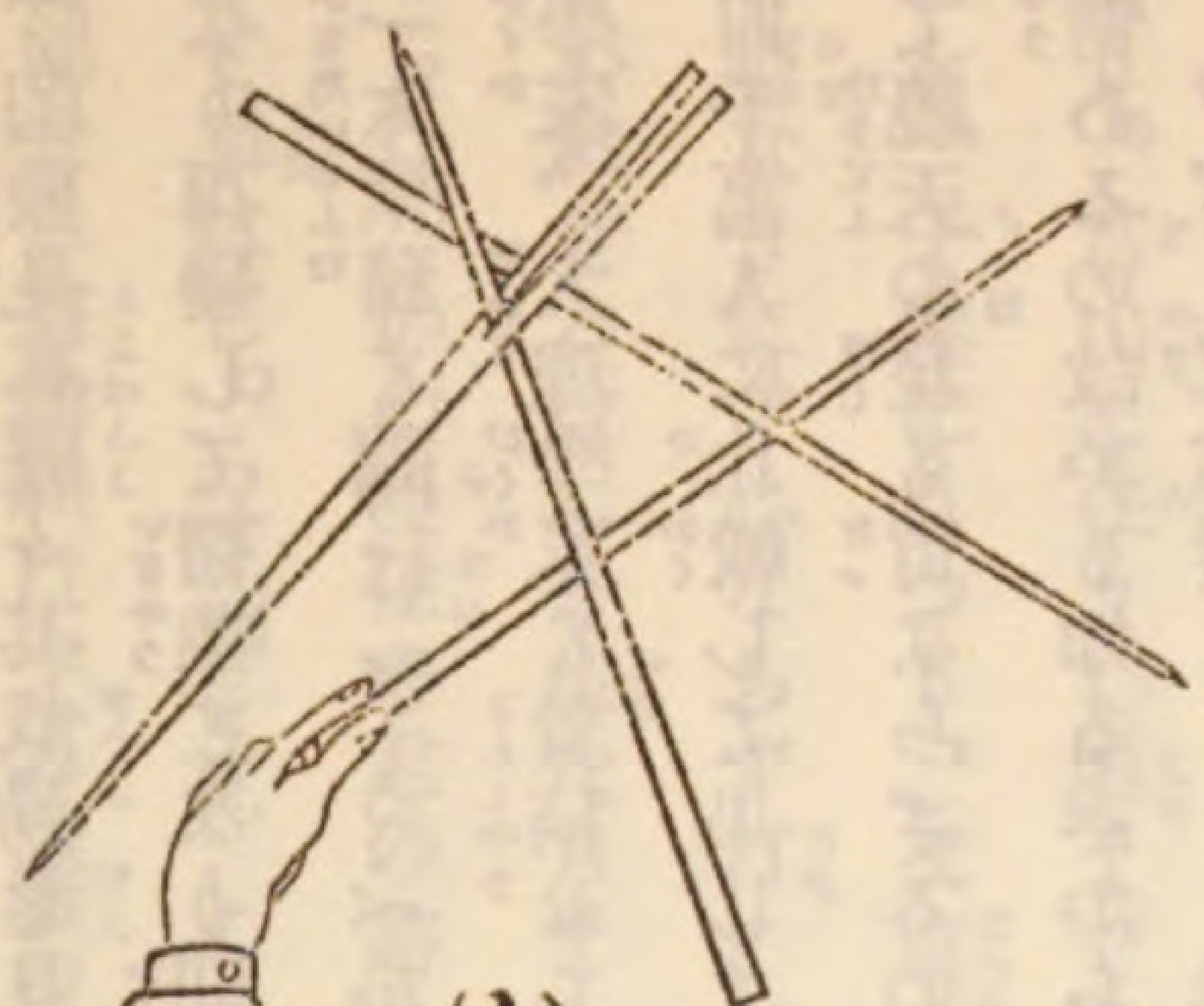
母は箱と尺度とを持ち來り子供に向ひ「坊やお前に是丈上げるから此箱の對角線をじかに測つて御覽」と云ふべし。然るときは。子供は少し考へて「此箱は蓋が取れないから困る蓋があけば斜かひに尺度を入れて測



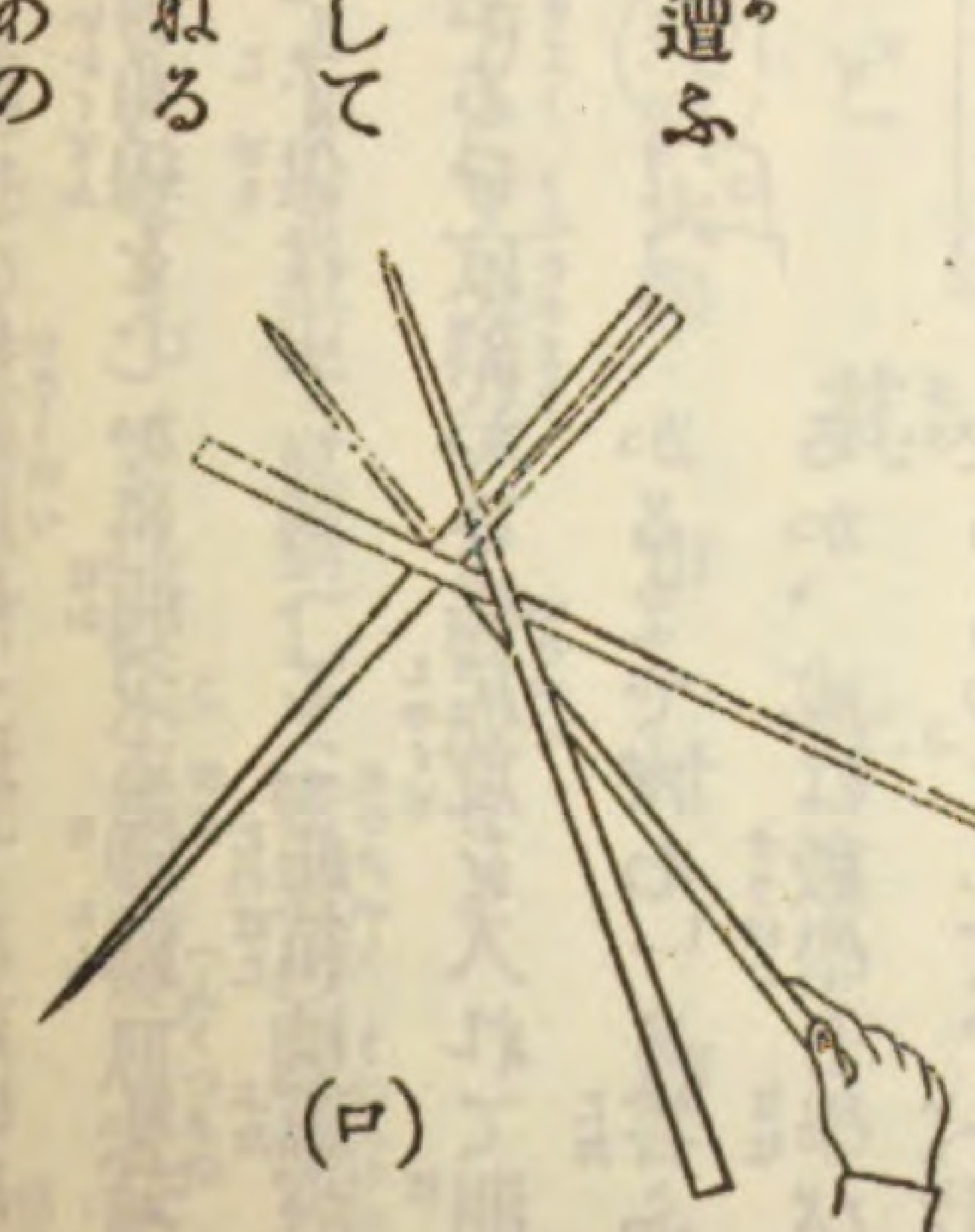
かるまでだわ」と答ふるか、或は數學を學びたるものなれば、一面の巾と長さを測り又高さを測りて 巾^2+長^2+高^{2}なりと應ふべし。隙さず、母は箱の底板厚き時は如何、尺度の巾廣き時は如何、計算しては直接に測定するにあらずなどいひて、暫くじらしおき。若し考へ得ざる場合には漸う〳〵上圖に示す

が如く机上の一方より長さ丈の距離を動かし、尺度にて幾何あるかを測つて見すべし。是は迂遠の理論よりも實際に近道あるとを教ふるものなり

(2)固定したる二交叉棒に倚せかけたる一棒より成れる三交叉棒を同時に他の一棒を以て持ち上げる事棒なれば宜しきも、餘り大きと故に母なる人は先づ爪楊枝四本を持ち來り、其内一本の頭を縦に切目つくり、其處へ他の一本を挿嵌し、殘り二本の何れか一本を倚せ懸け、三叉を造ると(イ)圖の如くすべし。扨て一本を小供に與へて母は「是で三叉のまゝあげて頂戴」と云へば、彼は如何にもして揚んと試みるも一本を滑り落ち固定二叉は倒るべきを以て種々熟考し最早厭氣を催


(イ)

うし「もうだめだ」と叫ぶに至れば、母はおら三叉楊枝を(ロ)圖の位置になさんが爲に二叉を推して懸れる一本をづらし遂に之を叉より外づすと同時に手に持てる一本にて巧に受取り叉下に潜らすなり然る時は二叉手前へ倒れ即ち(ロ)圖の有様となり其儘持ち揚げ得ると自在なり。是れ三叉それ自身の組合せの偶合は以前と異なれども一種の三叉を一本にて持ち上ぐるには相違なし。こは些細の遊戯なれども小供の工夫力を發育せしむる無邪氣なる趣向といふて宜しからんや


(ロ)

(3)幾何の汽車に出遭ふ

「今度は一つお話をしておしまへにお前に尋ねるとがある」と謂ひて「あの米國の桑港から紐育迄鐵道線路が往復二條宛敷

いてあるがね、其兩地は各毎日一定時に一つしか瀛車が出ないで互に向きあつて走るのよ、ところが七日間かゝつて一地より他地に達するのである、今桑港を定刻發の瀛車に乘つてお前が行くならば紐育へ着く迄に幾何の瀛車に出遭ふでしよ」と尋ぬれば、小供は直ちに「それぢや七日間には紐育からも七つ瀛車が出るから七つの瀛車に出遭はさあね」と答ふるならん。母は熟考せよといひて暫らく見合はすべし。若し「どうしてもそうだ」と云へば「お前が乘つた瀛車が出る前に途中に居る桑港行の瀛車はなきか」とづん／＼推し詰め終に「そうよ十四だつた」と叫ぶに至らしむるを要す。幾等か思考力を磨くものなり

家庭の教育

（一）大切なる一事

世界の富を身に集つめ、學術の奧義を究わめ、人よりはあがめらるゝ地位に立ち、傍より觀る者の羨みの中心となるの外、何不自由なきが如き結構なる身分となるも、若し不幸にして大切なる一物を欠ぐときは、持てる凡べての寶も寶の功を爲さず、凡べての學問、地位も殆ど無益の有樣となるものあり。大切なる一物とは即ち斷定の力なり。

非常に記憶に富める人も、之れなくしては記憶を利用すること能たはず。大なる想像に富める人は、之なくしては反て失敗の基となり。事の正邪も思ひ別くること能はず。物の眞僞を明にするを得ず。少しの難事に打ち勝つの力なきが故に、正道と知りても歩むを得ず、邪道と思ひても、避くると能たわざるべし。斷定の力は諸の能力の中、諸の寶の中、凡べて人の持つもの、中、大切にして貴とき寶なりと知るべし。されば、子女を持ちて、其の子の行く末を幸ひならしめんと望ぞみ給ふ親等は、何よりも先きにこの斷定の力を彼に養

はしめ、此の力を得ば、ます／＼強固とならしむることに力を盡くすこそ、眞に子女を愛して、最も好き送りものをなせしものと云ふべし。

（二）一性の卑屈の初

或る家に當年三才になれる男子あり。今や漸やく言語を語たるの初じめにて、可愛らしきと云わんことなし父母は元より身寄りのものども、面白半分に種々のことを敎しへけるが、或る日その子の叔母に當たれる一人の淑女、英語にて母と云ふことをマヽと敎へたり。以來母のとはと問へば、マヽ／＼と答たへしが、一日その子病のために打ち臥したるために、食事は凡べて柔はらかき物を用ゆることゝなり、飯も其日より粥となせり。數日の後病も癒へたれば、再び母の事は何と云ふやと問ひければ、こたびはマヽにあらずカユなりと答たへたり。傍らにありし人々、餘まりに可愛くも亦たおかしければ、聲を限ぎりに笑らひたりければ、その笑ひに恥じたりけん、以後は何と問ふも、決してマヽともカユとも答たへずなりけり。

かゝる事は有りがちの談しにして、小供の言語や考への、おかしくおもしろく、間違ふことにより、子を持てる父母が、一日には幾度か捧腹に堪へざることもあり。されども、かゝる時は、たゞ一個の翫弄物が、面白き狂言をなしたりと思ひて、笑らひ興ずるが如ときことをせず、親切にその過まりし以故を敎しへ、眞面目に眞實のことを敎しへ聞かしむべし。もし不幸にして小供の間違を面白がり、反て之れを操り返へして云わしむるが如きことあらば、その子は將來輕卒浮薄となり、おしやべりと、滑稽ずきとなりて、何にとても使かひ方のなき人となるべし。

されども若し餘まりに嚴びしくして、子供が少しの間違を爲し、或は云ふことある時、めんどうを忍のびず、丁寧に敎へずして、一言に叱かり付くることあらば、

その子はもへ出でたる新芽の、霜に遇ひてちゞれたるが如とく、卑屈に落ちいりて、所謂いぢけたる臆病者と成りはつべし。殊とに大切なる斷定力を養なふに方たりては、卑屈と云ふことは、最も避くべきの敵にして、一たび自由を失しない、卑屈に流がるゝことあらば、活潑なる斷定力は失せて跡なきに至るべし。然らば斷定力を敎しゆるに方たり、最初に決定すべきは、小供を無暗に叱かり、もしくは笑らひて卑屈にせざることゝ、小供の過まりをおもしろがりて、之れを操り返へし腦髓を亂だれしめざるにありと知らるべし。

（三）間違の基は不注意にあり

何の考へもなき、蛙の卵の如とき腦髓が、漸々考がへを起こし、斷定力を養ひ來たるには、最初は人の考へたる事を眞似を爲すより初じまるが故へに、小供の考を養しなふに方たりて、明瞭に了解し得べき手本を顯らわすべきは勿論なれども、これと共もに、小供をして、能く注意して、物事を斷定せしむることを敎しへざるべからず。注意なくして輕るく〲しく間違ひたる斷定をなし、もしくは知らざることを無暗に斷定する等の習慣を作くるときは、一生輕卒にして誤やまりたる思想に、己のれを支配せらるゝに至たるべし。故へに小供が七八つの頃にも至たりて、少こしく物事を解する樣になりたらば、見しもの、聞きしことを直だちに口にてしやべるの輕るはづみなる饒舌を禁じて、少しくその言ふ所を省へりみ、考へて後、語たることに慣れしむべし。これをたゞしくして、思慮ある斷定力を養しなふに、最も大切なる方法なり。凡て小供は、見しもの聞きしものに付きて、直だちに斷定を爲さんと試むるものにして、昨日運動の途すがら、川の水は山より流がれ來ると敎しへしにより、今日の雨を以ても天に山ある由ならんと斷定するが如き、誤り少なからざれば、斷定を下だすに先きだちて、充分に考がへ、

充分に明らかになりたる上、能く注意するの習慣を付くべし。而してその力を明らかに爲すには、教育の任に當たれる父母教師が、相類似したるものを並らべ示めして、その異となる所を示めし、或は小供をして其類似せる物を擧げしめて、自ら其腦を明らかにならしむるを以て、最良の方法とす。

（四）嘲弄は小供の斷定力を害す

一人の娘の子あり。兼ねて母が嘲弄半かばにその子に向かひて、お前はおたふくだよと云ひ聞かしめければ、其子は、毎度鏡に向かひて、己が顏を寫つし、おたふくとはかゝるものかと思ひ込み居りしに、或る時夜店に行き、おたふくの面ありければ、是れぞ眞のおたふくなりと云ひきかしめしに、子供は早速家に歸へり、再び鏡に向かひて、能く〳〵己が顏を寫つし比らべて見しに、おたふくとは全く異なりければ、早速母の元に行き、私の顏はおたふくとは異なりて候と云ひけり、されどもその小供は、大人となる迄、己れはおたふくと思ひつめたりき。かゝることは小事なりとはいへども、一時の嘲弄の語によりて、その子が長がき間の斷定力の間違ひを生ぜしむることは、往々にしてあり。是れは小さき事として、見捨つるべからざる事なり。

凡べて小供の教育は、精密に、眞じめに、丁寧に、細心なるを要する中に、特とに斷定力を養しなふには、一層之れ等のものを要するが故に、教育の任ある母は、一しほ心を用ちゆべきなり。

文明の器械

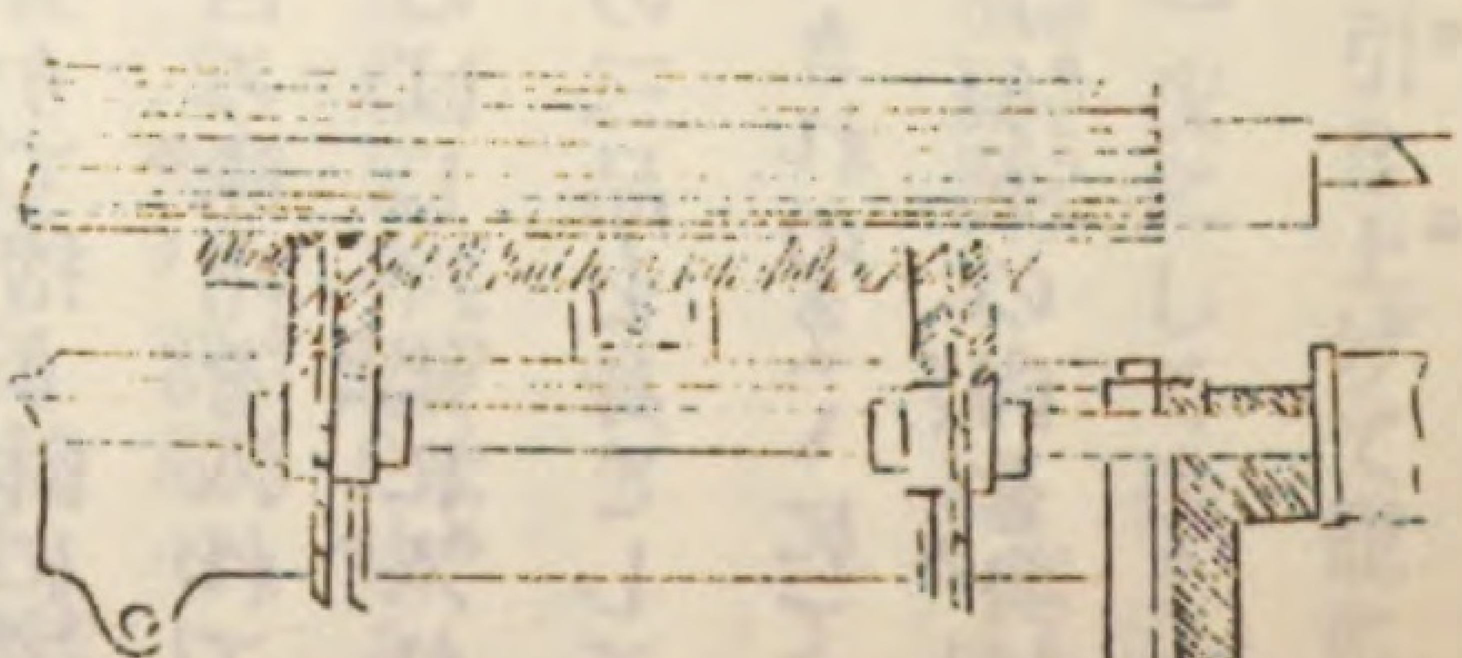
農家肺病の豫防器

最も身體の壯健なるべき農家の息子等が、青き顏色にて咳を爲しつゝ、病院に通よふを見るときは、如何に

も不思議なる心地すれども、不思議の原因は、穀物の殻を落とすに當たり、藁埃の鼻口等より入りて肺に進入し、遂に肺に焮衝を起こすによる也。好し直だちに焮衝は起こさずとも、生命の大分を短縮するは知るべきなり。此頃米國のダビッド、タンゼルと云ふ人、大に之れを憂れへて、農家のために一大利益のある器械を發明したり。仕掛けは打禾の道具の臺に蒸發氣を蓄くわへ、管を通して空中に散ずるも同時に、氣は空中の埃を濕るほし、重もみを付けて地上に落とす樣に出來たり。而して其管の端には、扉の如きものありて、蒸氣中に滿たざれば、おし開らきて出で得ざるが故へに、一は蒸氣の出づるの度を定だめ、一は蒸氣がそこに衝き當たりてシユー／＼と音を發して、廣ろく四方に散布するに供せり。この器械のために濕るをされて、地上に落つる埃は、少なくとも全躰の十分九なれば、其害の減ずることは、實に大なるを知るべし。農家の一般に早やくこの器の行き渡たりて、肺を害する人の少なくならんことは望ぞましきなり。

簡便なる箱造器械

圖に示めせるは、新らたに米國にて發明せられたる箱を造る器械也。雜貨品などを入るゝ箱は、從來は一々寸方を合わせて、巾と長さを切り、それより底と蓋のために溝を作くり來たりしが、此の器械に由るときは、一度にして巾も縱も切れ、同時に溝をも造るを得るが故へに、手數と時間を省ぶきて、至極簡便なりと云ふ。此器械の最も上には、丸ろき周圍に齒の付きたる鋸二つ食違がひてあり。下には卓子ありて、その上に板を置き、鋸を迴わすときは、巾も、長がさも、厚さも、



一時に切るを得、卓子は、上下自由になるを以て、板を厚つくも出來、薄すくも出來、又た兩端に溝を作くる器械ありて。同時に溝を造くるを得べしと云ふ。

調理の心得

同じ品を用ちひ、同じ手數をかけて、味はひよくもなり、又た不味ともなるは、妻君調理の心得次第なり。調理の上手と云へば、必ず名の變わりたる、法を盡くし、ものゝみを云ふにあらず、日常用ゆるものを、上手に造くると否なとを云ふ也。奇づらしき調理は、少數の家には用ひらるれども、一般の用とならず故に、今普通用ちゆる食物の調理方二三を報ずべし。

三品汁

之れは通常の味噌汁なり、去れども作くり方によりては、濃厚なる魚類等の中々に及ぶ所にあらず。作り方は先づ此の頃ならば、小鯛の鱗を去り、腹を明け、皮を去りて三枚におろし、骨を去りて擂り鉢にて擂り、肉の細まかくなりたるとき、白ろ味噌を入れて、又た〱擂りまぜ、之れを水にてのばし、鍋に入れて煮立たしめ、魚の切れ、胡蘿蔔、葱の三品を身として用ちゆべし。魚の更わりに鳥の肉を大きれのまゝにて湯出し、その汁にて味噌をとかし、後よりその肉を身として用ゆるもよし。

棒鱈でんぶ

堅魚節を削づり、一二個の梅干を加わへて、醬油と砂糖にて煮付け、別つに棒鱈を湯煮になし、之れを昆布と共もに薄醬油にて煮、その上より、先きの堅魚節を掛けて、花皿に盛るべし。

氣轉吸物

柚か、蜜柑の皮をむき、其中にて最も大きそうなる袋二三個を取り、筋を取り去り、成るべく内部を破ぶら

ざる樣、即ち汁の出でざる樣、そつと皮計りを割きて肉を引き出し、椀に入れ置き、上より薄葛の醤油汁をかけ青のり或はしようが一二片を入れて用ゆべし。

餅　あ　へ

もはや正月の餅は堅たくなりたらん、されど之れを利用せば、めづらしきあへものを得べし。作り方は餅の堅たくなりたるを、槌にて打ち割り、五六分の小塊となし、之れを胡麻の油にてあぐる時は、開らけて綿の如く、花の如くなるべし。さて別に葱を長がきまゝにて湯出上げたる上にて、小さく刻ざみ、味噌の中に入れて、能く摺り混ぜたるものに、少量の砂糖と、酢とを混じて、あげたる餅の上よりかけて用ゆべし。酒飲み等は、葱を生まのまゝにてきざみ、味噌の中に入れ酢のかわりに酒にてのばしたるを好むもあり。

羊羹豆腐

精製したる柔わらかき豆腐を、布巾にて絞ぼり、摺り鉢にいれて能く摺り、其の中へ鶏卵一二個を混じ、葛か、うどんの粉を少こし計り加わへて、手にてだんでの如く丸ろめ得るを度とし、四角なる器にいれ、上より能くおしつけ、小口より少しづゝ切りて油にて上ぐるなり。

一夜凍豆腐

豆腐を一寸四方位に切りて、熱湯の中に一寸とつけ、熱の中迄通りたりと思ふ頃に、引き上げて籠にならべ、夜間外に出だしおくときは、一夜にして生ま凍りの豆腐を得べし。之れは又た真の氷豆腐よりは一層美味なるものなり。

花粉豆腐

豆腐を布巾にて能く絞ぼり、之れに卵の白味をすこし加わへ、鹽、砂糖を入れて摺りまぜ、沸騰せし湯の上に上せて蒸すときは、堅たまるべし。之れを形美るわしく切りたる上より、卵の黄味を湯出抜きて、篩るひ

にてこしたるを、はら〳〵とかけて皿に盛る時は、黄白入り亂れて、美くしきこと云わんことなし。味わずして百味口に集つまりたる心地す。

傳染病毒黴菌の現狀及豫防

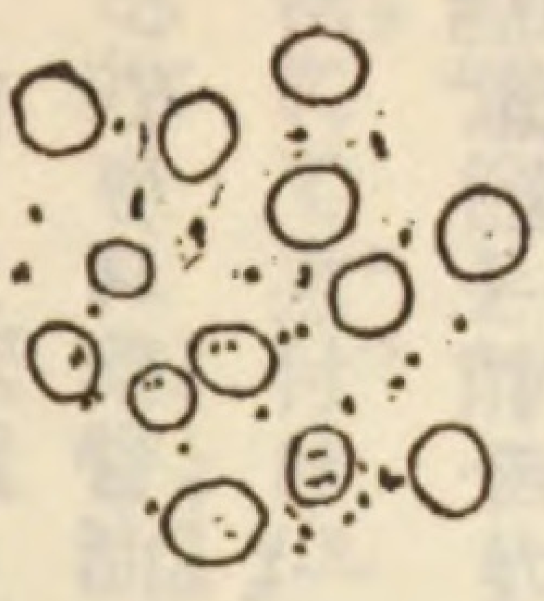
家庭叢書記者

去三日余は貴衆兩議員と共に北里醫學博士の所長として黴菌研究所なる芝愛宕町御成門外傳染病研究所を巡見したれば其巡覽したる實况を讀者に報しまゐらすべし

普通に傳染病とし言へばコレラ、腸チブス、赤利、チフテリヤ、發疹チブス、痘瘡の六種傳染病を指せども、北里氏は肺結核、肺炎、癩病、梅毒、痳疾、丹毒等の諸病を含有せしめり、今日已に斯の如し、今より幾星霜を經過し、氏の研究愈々益々極微の域に至らば、天下の諸病悉く黴菌の支配と作用を受け、氏は亦之を薬籠中の物と爲し、其の生殺擒縱の權を掌握すること疑なきが如し

研究所階上の一室には種々なる研究機械を陳列せり、北里氏は今日まで如何なる研究を爲し如何なる功績を遂げしか、則ち室内の周圍に裝置しある精巧の顯微鏡は能く氏が苦心經營の結果を照せり

●●●●●ペスト黴菌　圖に示せるは黑死病の黴菌を六百倍の顯微鏡に照したるものにして針頭程のものは即ちパチラスなり（以下の挿圖も之に倣ひ六百倍の顯微鏡にかけたるものと知るべし）



ペスト黴菌

黑死病は古來無慮無數の人類を惱まし昨年晩春の頃清國香港に病毒を逞したる恐怖すべき傳染病の一なり、

北里氏は政府の命により青山氏外數名の醫員と共に百

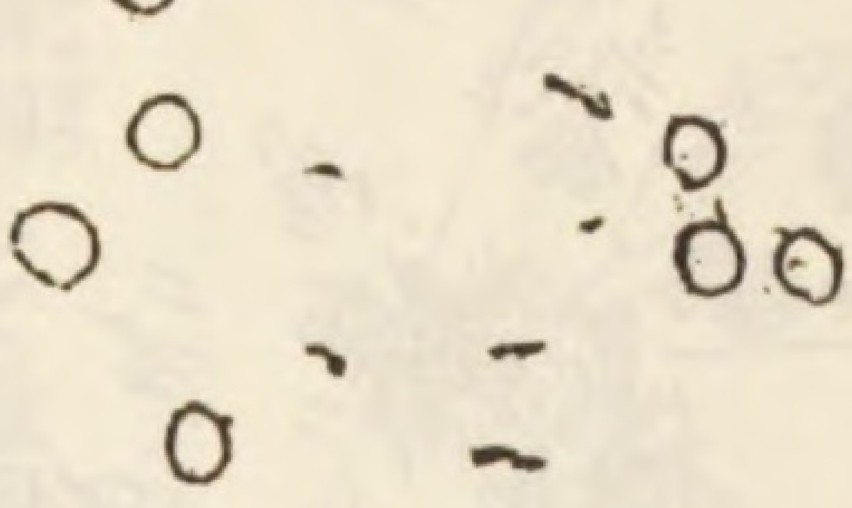
死を冒し病原探究の爲に香港に派遣せられ、終に其效を奏して歸朝したるは汎く世人の知る所なり、爾來氏は熱心に此病毒治療法に心血を注ぎ其菌の性質及免疫法を研究せしに、免疫法は充分囑望の價値あれば近々其詳細は發布せらるべしといふ、研究室の中央に此病毒に死せし人の臟腑を「アルコール」に浸したる器物と共に玻璃筒内に一頭の白「モルモット」(天竺鼠)あり、免疫研究の爲め幾回かペスト黴菌を注射したりしが、今や此少さき動物は其毒に慣れて過度の注射も無感覺に至りしといふ、以て免疫法の希望の大なるを證するに足る

●●●肺結核　肺結核の黴菌的作用に屬するは何人も知ると共に、其發見及療法が獨國コッホ氏に始まるを知る、我國に於てはコッホ氏の壘を摩するも猶餘りある北里博士によりて愈々顯明となれり、されば研究所建設以來氏の治療を受けたるもの合計百三十三人、内三人は全癒、六十八人は大半癒快、其二十人は轉地其他事故によりて退室、其十二人は死亡、三十人は現在治療中なりと、古來該病に罹れば早晩不歸の人となると思ひしに醫術の進歩亦た大なる哉、但し此療法は「ツベルクリン」療法即ち黴菌學的生產物を脊部より注射す（挿圖は咯痰中の黴菌を顯微鏡に照し見たるもの）



肺結核黴菌

●●●肺炎菌　も亦黴菌なり、そは上に示せるが如し、結核菌と異る點は、菌尠く且つ周圍に白皮を蔽ひ其中に一個乃至二個の黴菌を宿す



肺炎菌

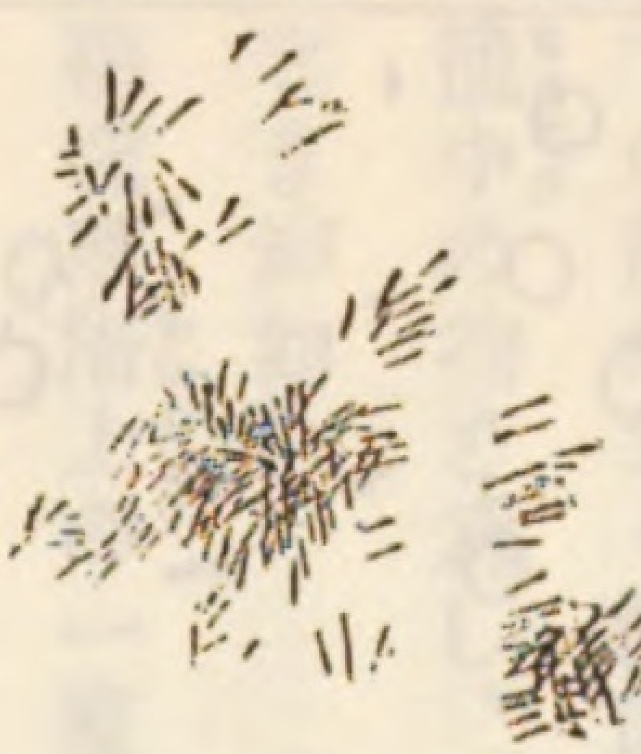
●●●●●チフテリヤ菌　チフテリヤは恐るべき小兒の病にして、一朝此毒に觸るれば健兒卒爾に倒る、明治十九年獨人リヨフレル氏其病原を發見し、北里博士が在獨中ベーリング氏と共に研究せしが、終に血清療法を以て完全なる免疫法を發見せり、血清療法とは他の動物に免疫法を施し其血清を人に注射する療法なり、研究所に於て



ジフテリヤ菌

昨年十一月以來該病治療せしは合計十九人、内全治十五人、死亡二人、治療中二人にして死亡二人は入室の際頗る危篤に陷り血清の効能を顯はすの暇なきものなりといふ、記者病室を巡見したるにチフテリヤの患者多く見受くれども大抵輕快なり、圖は咽喉の白膜中の黴菌を六百倍に見たるものと知るべし

●癩病　こは實に近時の發見なり、菌の形は殆ど結核菌に髣髴せり、其性質及免疫法等は氏が研究中なれば他日詳細を發表あるべしといふ、開所以來治療を受けたる該患者は廿六名悉く快方に趣き三名は全快せりと記者が目擊したるは一室四人、其中一人は全く快癒に趣き常人と異ならざりき、已に療法發見



癩病菌

せられたり、癩患者決して失望落膽するなかれ

●●●●腸チブス菌　腸チブス菌は奇異なる形狀を爲す、然れども黴菌なり、記者の巡見したる時には四五名の患者入院し、悉く「ツベルクリン」療法を受け、重症より輕快に赴けり、從來同所にて此治療を受けたるもの一人の死亡者なく回服期も普通

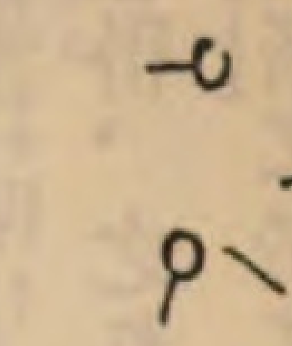


腸チブス菌

療法よりも一週間程短く且つ解熱速かにして豫後を善良ならしむと云ふ

●●●破傷風菌　破傷風菌の血清療法は北里氏が在獨逸中より研究ありたるものなれば其造詣する所蓋し少々にあ

らず、記者が顯微鏡にて見たる同微菌は孑孑の如きものにして其一端に球狀あるは卵子にして、之によりて蕃殖するといふ



破傷風菌

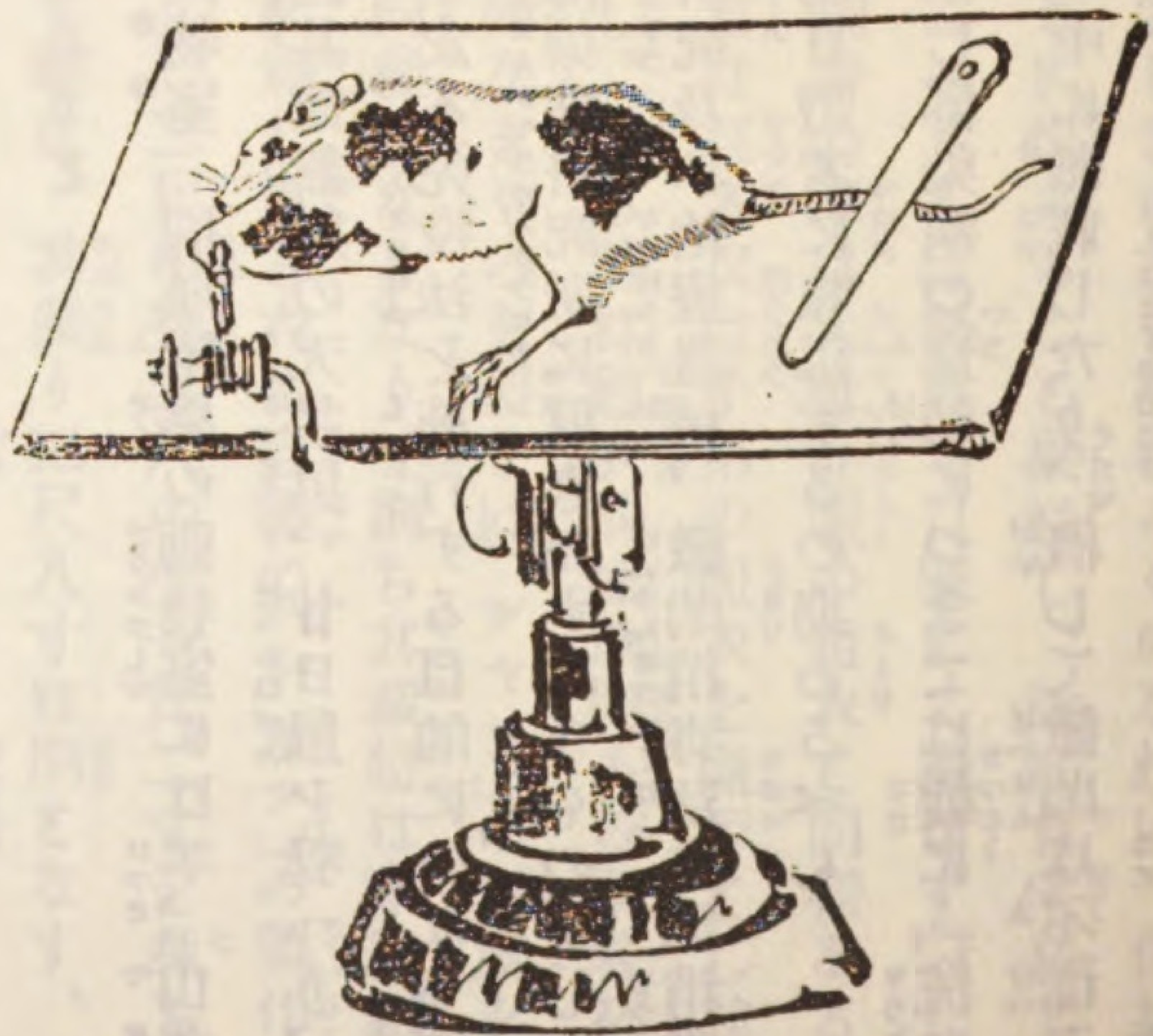
此外コレラ、赤痢、梅毒、丹毒、痳疾、間歇熱（マラリヤ熱とも瘧ともいへども微菌にあらず微細なる下等動物なり）等の微菌を顯微鏡によりて觀察したるもの尠からねど省略し、これより目下北里所長が研究實況の二三を示さん

●●●●
微菌製造　一個の瓶子を取り之に人體血液中の滋養分と等しき「ソップ」を盛れば『甲』の形狀たるべしと雖ども、之に微菌を植へて孵卵器に安置し、人の體溫（三十七八度）に等しき溫度を加ふる時は、肺結核ならば二三週間の後、『乙』の如き「ソップ」の表面に微菌の簇出するに至る、記者一見して實に慄然たりき、これ肺結核を解剖して得たるものと同質なりと博士に聞けり



甲　乙

●●●●
微菌附植　微菌を他の動物に附植して其効果を試驗するを見るに頗に興味あり、譬へば廿日鼠を器の上に載せ其頭尾を押へて固着せしめ、其臀部の肉を刺し局部に微菌を植え、之によりて鼠の病死するを待ち解剖して微菌蕃殖の形狀を驗す



試驗器

●●● **血清療法**　とは天然免疫を有せざる動物に病毒を注射して人工免疫と爲し其血液を絞り取り氷室に入れて血清と稱する透明液を析出し之を患者に注射するをいふ、「ヂフテリヤ」に就て其方法一班を言へば羊、馬、犬等の動物に最初は弱き病毒の極少量を注射し漸次に其分量を増す時は三四ヶ月の後は如何に强大病毒の多量を注入するも動物は些少の患害を蒙ることなきに至る此の動物の血清を人體及び動物體に注射するときは正確にヂフテリヤを豫防或ひは治療し得るといふ記者宛かも羊の血液を絞り取る實景を目撃したり、木臺の上に一頭の羊を制縛し一漢其の頭を抑へ、醫員三名羊の脚部を縱裁し、一條の靜脉を切開し、其の部分より血液を玻璃管に絞り取り、氷室に藏めて透明體の血清を得、之れをヂフテリヤ患者に注射するといふ、聞く同所に於て羊三頭に人工免疫法を施し終りたるが内二頭は他病によりて斃れ殘る羊は記者が目撃したるものにて已に二十餘回の血液を絞り取らるゝも健在なり、此外に目下馬二頭、羊七頭、犬二頭に免疫法を施しつゝありと

●●● **動物室**　同所附屬の動物室には羊、山羊、馬、猿、犬、兎其他無數の天竺鼠、廿日鼠を養へり、これ皆右に述べたる免疫法を施行する目的に外ならず

傳染病研究所に就き記すべきもの多し、治療の有樣、研究及び治療器械、黴菌消毒法其他消毒室等の事情は他日讀者に報導するの期あるべし

但し傳染病の豫防につきては曩に『流行病と家庭』との中に記載したり、概して黴菌は不潔なるものゝ媒介によりて蕃殖流行し、肺結核の如きは咯痰中の病毒を直感し或は乾燥の後空中に飛舞し之によりて他の健全の身體を侵擊せらるゝに至る、癩病の如きは血液又は組織中に蕃殖するものなれば甚しく其人の瘡口等に接するにあらざれば傳染の患なしといふ

手藝案內

綿入胴着

寒は明けたれども餘寒尙甚烈にしてあるが上にも重衣を欲するは人の情なり、されば胴着は愈々必要の防寒具なるを感す、日本服にては强いて胴着を要せずと雖も、强く寒氣を覺へば幾枚も衣服を重ねても妨なし、或る寒がりの老人の如きは繻絆より羽織に至るまで六七枚も襲ね、自分ながらに鎧を着たる心地せられ片手にてはなか〳〵擡げ得ずといふ人すらあり、これが日本服なればこそ左樣に幾枚もかさね得らるれども、西洋服にてはなか〳〵左樣な贅澤は申して居られず、夏にても冬にても「シャツ」の上に上衣に短衣に袴の三揃ひなり、素より冬季外出には外套を用ゆれども、家に入る時は脫却せざるべからず、それかと申しても洋服は二枚宛着用するもおかし氣なり、爰に於て胴着の必要を感するなり。

胴着は仕立屋の店其他にて販賣しあり、中に眞綿を入れ表を紙仕立にしたるもあり、「フランチル」に綿を詰めたるもあり、之を金錢にて購求する時は四五十錢の間に購求し得らるれども、曩にも屢々言ふが如く賣品は偏に外見を美にし、且つ直段の安廉なる點より客を引かんとすれば、及ぶだけ布帛地を節儉し一寸躰裁の宜しきのみを努むるものなれば、保持の點に於て久しきに堪ゆること疑はし、故に自宅にて製作すること能ふべくんば努めて自家にて製作すべし。

胴着の形は大抵洋服の短衣と同樣なるものなれば、細君は良人又は子弟の短衣を雛形とし其通りに裁縫すべし、然る時は短衣同樣胸開ある胴着を得ると雖も、胸開なきものを望まば「シャツ」の兩腕を落したるものと同樣となるなり、則ち其裁縫は家庭雜誌第四十三號に記載し置きたる自製の「シャツ」の製作中に記したる如く、二尺巾物五尺の中一尺二寸を裁ち去りて兩袖と爲す時は、其殘り三尺八寸は胴となす、玆に記す胴着は兩袖をつくるに及ばねば、最初より大巾三尺八寸の布帛を取り、巾二尺の內一尺八寸を身巾とし其殘餘四寸

はボタンを設くる胸襟と定め大巾なれば別に脊縫を用ゐず、裏地をつけ肩縫、裾縫、脇附等を終り一方の脇を明け置き眞綿を引くべし、但し「シヤツ」は前の丈より後身の丈少しく長きを常法とすれど、胴着は前後の丈同寸法に仕立つべし。

布帛地は表に本「フランチル」を用ゐなば申分なけれども、綿「フランチル」の上等品を用ゆるも可なり、裏地には毛繻子か更紗形の木綿をつけべし、此代價四十錢内外(上等綿「フランチル」及更紗木綿)之に眞綿の十錢程も延ばし、中心に青梅綿少許を薄く入るゝも宜しけれども、呉々も胴着の膨大なるは啻に外觀の佳ならざるのみならず、之が爲めに上着の「ボタン」の窮屈なるに至るなり、宜しく注意すべし、又表の綿「フランチル」は毛の方を外にするも内(則ち綿の向ふ側)にするも差したる相違なし、「シヤツ」ならば毛の方を内にすれば身體に密接すれども、胴着は綿入なれば毛の方を内にするも益なし、且胴着は「シヤツ」の上に着用するものなれば、成るべく外見の宜しき方を表にすべし。

汚抜と洗濯水

洋服は日本服と違ひ全洗といふ事誠に困難なり、勿論甚しく汚穢したる時には西洋洗濯屋の手に依頼し再び新鮮なりと雖も、小汚點小斑點にはそれも大行なり、然らば如何にして宜しかるべきか。

羅紗の汚點を除くには、其色の何たるを問はず、其局部に硅石の細末を塗抹し、温湯をかけ揉み洗ふべし

羅紗の墨汁斑痕を除く法は、新鮮なる鷄卵半箇に硫酸卅滴乃至は卅五滴ほどを混合し、清潔なる布を用ゐて斑點に點じ能く揉み洗ひて後清水にいすきだし乾燥せしむべし。

西洋にては洗濯水と稱して諸種の物品を調和し、之を瓶詰として販賣すれども我國にては未し、其製法は

　普通の石鹸(碎き又は削りて二升)曹達(三十二匁)雨水(一升)的列並油精(八匁)

右の割合にて調和し火上に徐々と攪ぜ合せ、大凡十分間沸騰せしめ、然る後適宜の器物に移して貯へ置き、入用の時使用するなり、其使用の法は洗濯すべき時、

水に混和して衣服を洗ふ。
別に簡易の法は清水六百四十匁、白鹸百七十匁、硝酸二匁五分を溶解して液汁中にて羅紗、フラチル等を洗濯すれば汚點班點の除去すること勿論なり。

社交一斑

流行の栞

春夢

人造眞珠の流行に就て

人造眞珠即ち贋造眞珠が髮具社會に流行の勢力を有する事實は、其都度〳〵の本雜誌に記して讀者に報せり、人造眞珠とは能く西洋菓子などに使用し其色眞に眞珠の色を爲せども甚だ厭味を帶びたり、髮具に之を用ゆるは根掛、簪の珠、若しくはいろ〳〵なる花簪のあしらひに用ゐ一寸外見の宜しき所より追々と巾幗社會に擴り中等以下の婦人は之を「ゴム」珠同樣に用ゐ中等以上の人にても此髮具を使ふに至り、其流行の有樣宛も一昨年迄流行の全盛を極めし「ゴム」の流行に髣髴たり、人造眞珠も「ゴム」も共に舶來的なれば二者共に其系統を等ふするは言を俟たず、又其流行の區域に於ても蔓延の形狀に於ても殆ど其揆を一にするが如し、故に曰く人造眞珠の流行は飽まで舶來的なり、然るに目下流行社會の潮流は滔々として復古の傾向なるに、其間に立ち此物が一の覇權を握るは抑も故なかるべからず。

記者曰く人造眞珠の流行の勢力ある重なる原因は價格廉にして其外見も品によりては高尚なる所尠からず、これ其の流行社會の意に投したるもの歟、記者はかゝる流行品の世間に流布するに對し決して惡口をきくものにあらず、寧ろ此平民的流行を喜ぶものなれども、聊か思ふ所を述べて購求者の一讀を煩はさんことを欲す。

譬へば人造眞珠の小粒を花簪の取合か又は根掛にはめあるものは、少し衣裝でも奇麗ならば正直正銘の眞珠と見紛ふべし、又中粒にても簪の玉としあるものも其使用者によりては其の果して眞なりや贋なるやを看破することを易からずと雖も昨今追々記者が目に觸るゝ徑三四分もあらんかと思はるゝ人造眞珠を十個乃至十二個を並べて根掛とするが如きに至りては記者大不同意を鳴らさゞるを得ず、何となれば試みに思ひ見るべし、徑三四分の眞珠十個乃至十二個を一人の婦人にて髮の間に挿むに至りては如何なる高貴富豪の人にても必らず出來難き大事業なり、又日本全國の眞珠を集めても恐く其需を遂せられざるべし、故にかゝるものを如何に高貴富豪の婦人が使用するとも、これは贋造でございますと看板を揭げ居るも同じきなり。

故に更に曰く人造眞珠を使用するも面白し、併しながら成るべく小粒なるを撰み中粒乃至大粒は斷然排斥すべし。

●●●老人向　此は鳥打帽子形にて最も多く行はるゝはチリンプとて毛の卷き縮れる物にて更に贅澤なるは獺の皮を用ゐ代價はチリンプ六十錢より一圓廿錢位獺は五圓より十二圓位までなり
近來は一般に内國にて帽子の製法大に發達し小石川の製帽會社製及大坂製の中には舶來品にも勝るものを產出し爲めに大に輸入を減ずるに至りたり小石川の製帽會社にては舊時は本所の職工柳岩吉氏之を督して其製法にも缺點多かりしかは二名の外國人を聘し日に五十ダース以上を製出すといふ

流行のタボ止め

ゴムは全く廢止せられ、其最も行はるゝは鋼製の上に鯨鬚を被せたるもの之に亞げるは單純の鋼鐵製なり、塗は電氣鍍金又ははし一塗は多く行はる、近來日清戰爭の影響を蒙り、聯隊旗、刀劍の模樣したるもの若しくは鐵砲形も見受けらる。

帽子

近來流行の帽子の新形及其の相場を聞くに左の如し。
●●●官吏向　角形の中山又は折裏形にて鍔は成る可く小さき方にて價は壹圓八九十錢より三圓位まで
●●●●●●書生向兼番頭向　羅紗又はスコッチ若くは天鵞絨にて頂上を八葉の切れにて縫ひ合はせたるもの價は三十錢より六十錢位まで
●●●●●商館の手代向　ニウハッションとて最近の流行なるが鍔の最も小に山も低きものにて價二圓以上より三圓五十錢位なるもの追々流行の模樣あり
●●●●●學生の一般用　俗に海軍帽子とて前に徽章あるものにて小學校生徒も中學生徒も皆之を用ゐ代價は小兒物は三十錢より六十錢位まで大人は六十錢より一圓四十錢位までにて從來は多く黑羅紗を用ゐし事も近來は紺絨紗を用ふるもの多し現に築地中學、神田共立學校、獨逸學協會等の制帽は皆紺羅紗を爲したるが是れは色の褪め方遅くして德用なりとぞ

日用品物價（二月五日）

◎白米（一圓に付）㋑一等白米七升八合㋺二等白米八升㋩三等白米八升五合㋥四等白米八升八合㋭五等白米九升二合
◎雜穀　㋑南京白大豆一斗八升五合㋺同青大豆一斗八升五合㋩同瀨色小豆一斗四升三合㋥同白小豆一斗五升㋭八戸大豆一斗七升七合㋬箱壁瀨色小豆一斗四升五合㋣目無白さ一斗二升㋠木石大豆一斗七升六合㋷南部大豆一斗八升㋸越後大豆一斗五升三合㋾室蘭黑豆二斗
◎鹽　㋑赤穗三俵九分五厘㋺大鹽丼に八家四俵一分五厘㋩本齋六俵三分㋥新齋七俵二分五厘
◎種油　㋑胡麻十一圓二十錢㋺桐油七圓七十錢㋩荏油十三圓七十錢㋥地水九圓也㋭久ト九圓七十七錢㋬非桁九圓七十七錢㋣星印九圓八十四錢㋠一川九圓八十一錢㋷坂箱詰九圓七十錢㋸伊勢箱九圓八十錢㋾イ印九圓七十四錢㋻チャスタ一圓八十六錢㋕タング一圓八十六錢㋵ホーキ一圓八十六錢

雜録

月下に雪の梅を折る

（口絵の繪解き）

梅花幾點、月一痕、且く雪裡の春を折る。此は是れ大納言公任詠歌の圖なり。歌に曰ふ、

しら〳〵としらけたる夜の月かげに、
雪かきわけて梅の花をる。

時事一斑

有栖川熾仁の宮薨す

一月二十四日參謀總長有栖川熾仁の宮薨す。越て二十九日東京城の北豐島岡に葬る。親王皇家の懿親を以て常に兵馬統督の任に當り、戊辰東征の日大總督として維新の業を翼成し、明治十年西南の役亦征討總督として禍亂を戡定し、今回日清の事ある、參謀總長として進んで廣島の大本營に在りしが、我軍の連戰連勝する、興國の大業今や成るに垂んとして未だ成るを見るに及ばずして薨す。嗚呼哀い哉。

國民軍

一月二十五日國民軍條例定められ、二月一日國民兵召集規則發布せらる。國民軍は以て主として衞戍若くは邊境の警備に充るもの。而して國民皆兵主義の漸く事實にせられんとするを意味す。

近時の女學界

近時の女學界其寂々たる冬日の景なること依然たり。然れども其寂々は次第に凋零に向ふべき寂々にはあらずして、前途に百花の春を望みつゝある寂々なり。一陽來復の兆候あり。或人曰く『頃者女學生中裁縫手藝の如き實用的學科の講習を望むもの多しと。

幼稚園

一雜誌に、全國公私立の幼稚園其數五十。中大坂七、

京都六、東京五、高知四、靜岡、和歌山、山口各三、長野、廣島各二、神奈川、長崎、群馬、山梨、富山、石川、茨城、福島、宮城、青森、三重、奈良、岡山、熊本、北海道各一なり。

創立最も早きものは明治十二年にして、十九年二十年頃を最も多しとす。

現在保姆數有資格者八十六名、無資格者三十七名。而して幼兒總數男四百二名、女三百廿六名合計七百廿八名。

保育課目中幼兒の最も好むもの、積木三十二、修身說話九、畵方八、繋方六、豆細工五、唱歌、箸排、環排、縫取、織紙四、板排、戶外遊戲、摺紙三、讀方、土細工、綉紙、智惠の板、旗一。其最も好まざるものは、箸排八、環排七、計方六、板排織紙四、豆細工二、畵方、繋方二、紙刺、縫取、摺紙、組字、三躰、組板、組紙一。

亦以て幼兒乾坤の一斑を知るべし。

學校躰育

躰操は一時各學校に於て頗る冷遇せられたりき。殊に女子躰操の如き最も甚しく、而して其冷遇せらるゝの比例は都會の學校を地方の學校よりも更に甚しとなしたりき。其重なる理由の一は美容を損すべしとの信仰にありしと云ふ。

而して今や戰爭の氣概と共に大に躰操熱の復興を見とすると同時に、女子躰操に於ては美容躰操の說あり。

宗教界

批評時代の影響は宗教界に於ける確信の位置に多少の轉動を與へたり。中には其人に向て敎說する所と自家眞成の所信とに自ら一片の皮膜を置くものさへなきにあらず。

未だ已れに確信なくして能く人を確信せしむるものはあらず。敎界の不振怪むに足らざるのみ。宗敎界豈氣運を咎むべけんや。豈人なきを歎ずべけんや。

然れども常に故くして常に新らしきは、古よりして宗敎の眞意義なり。安ぞ批評に批評したるの結果が却て再び三たび舊時の意義を繰返し來るに非るなきを知らんや。

前號家庭雜誌附錄「ビスマーク夫人」「村の敎師」は、編輯結了後都合ありて次號に讓り候爲め、表紙の記入は之を改むるに及ばざりしものに候。看客諒せよ。

ドクトル佐伯理一郎先生譯補



懷中手帖形○印刷鮮明
精圖百卅七入製本堅牢
正價金卅五錢
郵稅二錢

發兌所 東京日本橋區馬喰町二丁目 島村利助

此書は戰時及び平時の救急看病並に病人運搬法を極めて平易に且つ一々精密なる圖畫を以て說き明したるものにして世の從軍者、醫家、看病人は申すに及ばず赤十字及衛生の事業に熱心の人、汽車、汽船及製造場に從事の人、學校教員並に注意深き一般の人々は各一本を購ふて不慮の災難に備へ玉ふべし

發行所 東京本鄉區龍岡町卅四番地 吐鳳堂書店

○家庭雜誌第四卷

自第三十三號至第四十四號十二冊合本

定價五十錢
運賃不申受

發行所 東京日吉町 家庭雜誌社

家庭叢書第八卷

簡易料理

二月八日發兌

定價十錢
郵稅二錢

世界料理法を指南せる書尠からず、然れども其多くは會席的正式的にして素人の家庭にては行はれ難きもの多し、此書は實驗より得たる、家庭にて容易に出來得べき物菜をしをりしたるものなり其目錄は『簡易調理』『料理秘訣』『日本料理』『西洋料理』『飯の種類』『漬物製造』等

發兌元 東京日吉町 民友社

家庭雜誌

定價

○毎月二回十日廿五日發兌

		郵稅
一冊	金五錢	金五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	地方共 金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

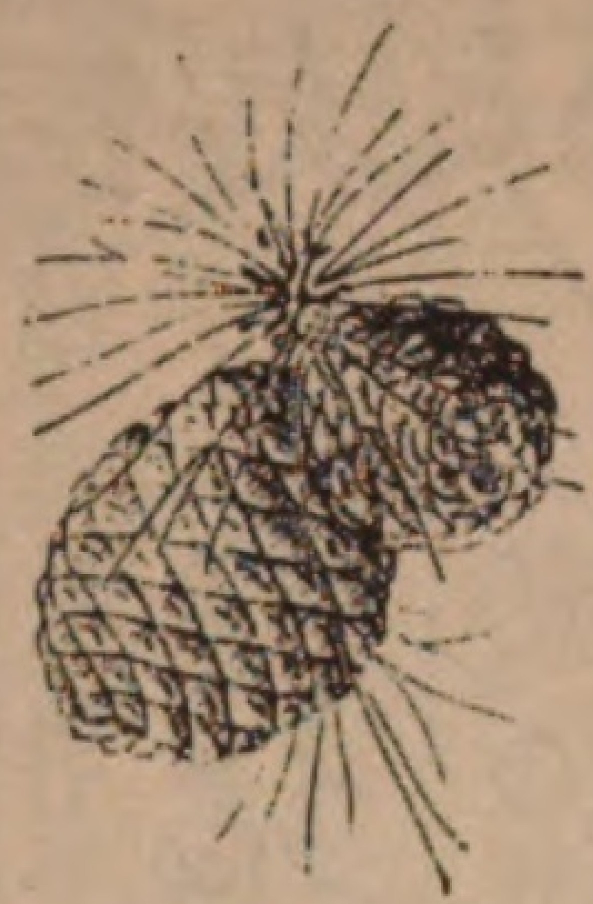
發行兼印刷人 有馬俊彥
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社 (電話番號七十番)

社告

家庭雜誌第四十五號御注文の御方有之候處同號は悉皆賣切れ殘品無之に付御注文に應兼候此段御斷り申上候

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行



明治廿五年九月十四日遞信省認可